鳥取市

横枕古墳群
発掘調査概要報告書

姫鳥線整備促進関連事業に係る
横枕38・40・41号墳の調査

2004

財団法人　鳥取市文化財団

鳥取市

横枕古墳群
発掘調査概要報告書

姫鳥線整備促進関連事業に係る
横枕38・40・41号墳の調査

序　　文

鳥取市内には数多くの原始・古代遺跡が存在しておりますが、近年の各種開発事業に伴って発掘調査が必要となり、消えていく遺跡もあるのが現状です。しかしながら埋蔵文化財はその地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、財団法人　鳥取市文化財団では開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関の協力を得ながら埋蔵文化財発掘調査事業を進めているところです。

さて、ここに報告いたします横枕古墳群の発掘調査事業は、中国横断自動車道姫路鳥取線整備促進事業に係る埋蔵文化財発掘調査として鳥取市教育委員会の指導のもとに平成15(2003)年度に実施したものです。この古墳群は千代川左岸の丘陵上から丘陵裾に展開しておりますが、近年開発に伴う発掘調査が急速に進み、50基にものぼる古墳や多くのその他の遺構が検出・調査され、縄文時代から古墳時代にかけての土器や玉類、金属器等が多数検出されてきました。今回の調査では3基の古墳と土壙等が検出され、この地域の古代文化の一端を明らかにする貴重な資料を提供してくれました。ささやかな冊子ではありますが、市民の皆様をはじめとして関係の皆様に広く活用していただければ幸いです。

おわりになりましたが、今回の発掘調査に際し、深いご理解とご協力を賜りました地権者ならびに地元の皆様をはじめ関係の皆様に心から感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人　鳥取市文化財団
理事長　石　谷　雅　文

目　　次

序文
目次・例言
Ⅰ　はじめに……1
Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境……2
Ⅲ　発掘調査の概要……4
　1．横枕38号墳……4
　2．横枕40号墳……8
　3．横枕41号墳……8
　4．その他の遺構……15
　　1）SK-01……15
　　2）溝状遺構……17
報告書抄録

挿図目次

第1図　横枕古墳群周辺遺跡分布図……3
第2図　横枕38号墳周辺調査地地形図　…5、6
第3図　横枕38号墳周辺調査地遺存図……7
第4図　横枕40・41号墳周辺調査地地形図
　……9、10
第5図　横枕40・41号墳周辺調査地遺存図及び横枕40号墳墳丘断面図、ピット状遺構断面図　…11、12
第6図　横枕41号墳墳丘断面図　……13、14
第7図　横枕41号墳出土遺物実測図……15
第8図　SK-01実測図……16
第9図　SK-01出土遺物実測図……17

図版目次

PL1. 1. 調査地遠景航空写真(東南東上空から)
　2. 横枕38号墳周辺調査地遠景(南東から)
　3. 横枕40・41号墳周辺調査地遠景(北西から)
PL2. 1. 横枕38号墳周辺調査地調査前(東から)
　2. 横枕38号墳周辺調査地調査後(南南東から)
　3. 横枕38号墳墳丘断面(南から)
PL3. 1. 横枕40号墳周辺調査地調査前(南西から)
　2. 横枕40号墳周辺調査地調査後(西南西から)
　3. 横枕40号墳墳丘断面(北東から)
PL4. 1. 横枕40号墳西南西側周溝部断面(南東から)
　2. 横枕40号墳北東側墳裾部遺物出土状況(北東から)
　3. 横枕41号墳周辺調査地調査前(北東から)
PL5. 1. 横枕41号墳周辺調査地調査後(北東から)
　2. 横枕41号墳墳丘断面(1)(南西から)
　3. 横枕41号墳墳丘断面(2)(南東から)
PL6. 1. 横枕41号墳出土遺物
　2. P-2断面(上)、完掘状況(下)(北北西から)
　3. P-3断面(上)、完掘状況(下)(南東から)
PL7. 1. SK-01検出状況(北西から)
　2. SK-01縦断面(南東から)
　3. SK-01掘り下げ状況(南東から)
PL8. 1. SK-01内遺物出土状況(左／南西から；右／南東から)
　2. SK-01出土遺物(1)
PL9. 1. SK-01出土遺物(2)

例　　言

1．本書は、姫鳥線整備促進事業に伴って実施した横枕古墳群の発掘調査概要報告書である。
2．調査は、財団法人　鳥取開発公社の委託を受けて、財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財調査センターが鳥取市教育委員会の指導のもとに実施した。
3．調査地は丘陵上と裾とに分かれ、所在地は、それぞれ鳥取市横枕字天王谷・同上味野字小屋場ノ一と同横枕字糖ノ尻下・同横枕字天王谷・同上味野字堤下タである。
4．実測図・図版等の作成は、調査に参加した全員の協力を得て山田・神谷が行い、高垣が補佐した。
5．本書の執筆・編集は山田が行い、神谷・前田・高垣が補佐した。
6．調査によって作成された記録類および出土遺物は鳥取市教育委員会に保管されている。
7．現地調査から報告書作成に至るまで多くの方々からの協力、指導ならびに助言をいただいた。記して厚く感謝いたします。

鳥取県県土整備部道路課、鳥取県姫路鳥取線用地事務所、財団法人　鳥取開発公社、西尾　功、門前　実、久保智康　　(順不同、敬称略)

Ⅰ　はじめに

1．調査に至る経緯・調査の経過

横枕古墳群は、鳥取市横枕・上味野・竹生地内の標高30～150m程度の丘陵上およびその裾部に形成されている古墳群である。周辺では古くから山裾部に露出したいくつかの横穴式石室が知られていたが、その後の県教育委員会の分布調査等によって大小様々な古墳50基余りが確認されるとともに、周辺平野部にも遺物散布地が認められ、便宜上これらにも横枕所在遺跡との仮称が付されている。この地域での発掘調査は、平成11年に浄水施設整備事業に伴って当該古墳群の調査が初めて本格的に実施され、それ以降、中国横断自動車道　姫路鳥取線整備事業によって急速に進みつつある。

今回の発掘調査もこの姫路鳥取線整備事業に伴うもので、事業では横枕集落の前面に広がる平野・低丘陵から集落北東の丘陵裾にかけて路線が計画されている。当初当該地区内周辺には上述のとおりいくつかの古墳が認められていたが、鳥取市教育委員会によって平成10年度から周辺の分布調査が再度実施され複数の古墳や遺物散布地が確認され、平成12年度には試掘調査も行われて須恵器等の遺物が出土するとともに古墳の盛土や土坑・溝状遺構等が検出された。その後これらの結果をもとに当該地区内の埋蔵文化財の取り扱いについて関係機関の間で協議・検討が重ねられたが、路線内の遺跡は現状での保護・保存が難しく、記録保存で対応することとなった。

これまでの調査は、平成12～14年度に集落前面の低丘陵上の遺跡について財団法人　鳥取開発公社の委託を受けた財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財調査センターが実施したが、平成15年度についても、同公社の委託を受けて、同センターが引き続き調査を実施した。

今回の調査地は横枕集落の北東側丘陵上および丘陵裾に分かれるが、調査は平成15年11月に伐開に着手した。伐開後、丘陵上の調査地は、以前の隣接調査との整合性を持たせるため、２基の古墳の中心を結ぶラインにかつての測量杭を復元再設定・延長して基準ラインを設け(C35、C39～C42杭)、そのラインに直交あるいは角度を振ってその他の杭を設定した。また丘陵裾の調査地は、調査地に現存する段にほぼ並行する基準ラインを墳丘上から任意で設け(C0～C2杭)、C1杭を中心にこのラインと直交するライン上にその他の測量杭を設定した。その後、業者委託による現況の地形測量を行うとともに資材を搬入し、丘陵裾の調査区の表土除去から調査を進めた。

その結果、丘陵上の調査区では古墳時代中期末から後期前葉頃とみられる円墳１基(41号墳)と時期不明の円墳１基(40号墳)およびピット状遺構(P-1・2・3)が検出され、丘陵裾の調査区では調査範囲が狭小のため詳細不明の円墳１基(38号墳)と鎌倉時代初頭頃とみられる土壙(SK-01)や時期不明の溝状遺構が検出された。なお41号墳については、平成13年度に南西端部が一部調査消滅しており、また38号墳とその他の遺構および40号墳についてはいずれも調査対象地の境界が墳丘上や遺構上にくるため、対象地内で可能な調査を行った。こうして降雪等によって一時調査の中断もあったものの、各種記録類を作成して平成16年３月に現地調査を終了するとともに現地調査と並行して記録類の整理、出土遺物の整理を行い、報告書作成作業を行った。

2．調査の組織・体制

発掘調査の組織・体制は以下のとおりである。

調査主体　財団法人　鳥取市文化財団
　　理 事 長　　石谷雅文(副市長)
　　副理事長　　中川俊隆(教育長)　　三田三香子
　　常務理事・事務局長　　小谷荘太郎
調査指導　鳥取市教育委員会　庶務課　文化財室
事 務 局　財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財調査センター

所　　長　　前田　均
調査事務　　秋田澄世
調査担当　調 査 員　　前田　均　　山田真宏
調査補助員　神谷伊鈴　　杉本利子　　矢芝泰伸　　永田りん太郎　　高垣恵巳子

Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境

1．横枕古墳群の位置

鳥取市は、鳥取県東部に位置する山陰の中核都市の一つで、平成16年２月現在で、面積237.20㎢、人口15万２千人余りを擁する県庁所在地として政治・経済・文化の中心的な役割を担っている。また現在は近隣の９町村との間で合併協議がなされており、人口20万人を越える特例市としてさらなる発展を目指している。地理的には、市の北側には日本海とそれに臨む広大な鳥取砂丘が広がり、中央部には中国山地に端を発する千代川が北流する。市域の中心はこの千代川の沖積作用によって形成された鳥取平野が占め、この平野の周縁部は丘陵地となっている。

今回の調査対象である横枕古墳群は、鳥取平野南西部に面する標高30～150m程度の丘陵上、裾部およびその前面の独立丘陵に立地する。JR鳥取駅からは主要地方道鳥取鹿野倉吉線から主要地方道鳥取河原線を経由して南西方向に計約６㎞で、横枕集落の後背から北東部およびその前面に位置する。所在地名は鳥取市横枕、上味野、竹生である。この周辺では、約３㎞ほど北側に昭和60(1985)年の鳥取国体を契機として国道29号線(旧国道53号線南バイパス)が整備されたことから次第に開発が広がり始め、近年では浄水施設整備や本調査の契機である道路整備事業が進展しており、今後開発が加速度的に展開しその現風景が一変する可能性も考えられる。

2．横枕古墳群の歴史的環境

鳥取平野において人々の最初の足跡が認められるのは千代川東岸の浜坂地内の砂丘で採取された黒曜石製の有舌尖頭器で、詳細は不明ながら旧石器時代にまで遡る可能性を持つ遺物である。　縄文時代では市域の西端部、白兎海岸から南へ約１㎞の丘陵裾部から前期中頃や後期の土器が採取された(内海中所在遺跡)他、横枕古墳群の千代川を挟んだ対岸の丘陵上に立地する美和32・33号墳の盛土下層から前期末や中期の土器が僅かに検出されている。また、市西部の湖山池南東岸の低湿地には、現在のところ前期末を初源とする桂見遺跡や中期の土器も出土している東桂見遺跡、布勢第１遺跡が立地するとともに湖山池に浮かぶ青島遺跡では磨消縄文の浅鉢など多くの土器が出土し、ともに後期を中心とした低湿地遺跡群として知られる。横枕古墳群周辺では、２㎞ほど北の本高段木遺跡から二次堆積と見られるものの晩期の突帯文土器が、その１㎞ほど北の山ヶ鼻遺跡からは後期後葉から晩期前葉の土器群が、さらにその１㎞ほど北の千代川の自然堤防上に立地する古海遺跡からは晩期の突帯文土器が出土している。

弥生時代に入ると縄文時代から引き続き営まれた湖山池南東岸の遺跡群の他、掘立柱建物や水路・水田、各種多彩な遺物が検出された鳥取平野中央部の岩吉遺跡、千代川東岸の西大路土居遺跡から前期の遺物が検出されており、それ以降その他に古海、菖蒲、山ヶ鼻、服部、秋里、帆城、湖山第２、布勢第２、大桝、北村恵儀谷等の遺跡が営まれ、後期にはその数が飛躍的に増加する。またこれらの遺跡の外縁丘陵部に位置する西桂見遺跡や桂見、布勢鶴指奥、服部の各墳墓群には墳丘墓や土壙墓が築かれている。　古墳時代の集落遺跡の調査事例は少ないが、現在のところ古墳の立地する丘陵裾の微高地上等に、あるいは現集落と重なって営まれたものと考えられている。弥生時代から続くものとしては、湖山池周辺の遺跡群があるが、今のところいずれも大集落ではなく微高地上に住居跡が点在する状況である。古墳に目を向けると、鳥取平野周辺部の丘陵上に大小様々な古墳が造営される。このうち千代川左岸の湖山池周辺では、弥生時代からの系譜を引くと見られる小規模な方墳を主体とした桂見古墳群、倉

1．高住古墳群
2．倉見古墳群
3．桂見墳墓群
4．布勢鍬指奥墳墓群
5．里仁古墳群
6．大塚古墳群
7．野坂古墳群
8．栫間古墳群
9．徳尾古墳群
10．古海古墳群
11．本高古墳群
12．宮谷古墳群
13．小森山古墳群
14．下段古墳群
15．上段古墳群
16．上原古墳群
17．鈎山古墳群
18．服部古墳群
19．下味野古墳群
20．篠田古墳群
21．横枕古墳群
22．玉津古墳群
23．倭文古墳群
24．長谷古墳群
25．橋本古墳群
26．美和古墳群
27．古郡家古墳群
28．八坂古墳群
29．園原古墳群
30．越路古墳群

A．東桂見遺跡
B．布勢第１遺跡
C．古海遺跡
D．野坂遺跡
E．大楠遺跡
F．小森山遺跡
G．下段遺跡
H．北村恵儀谷遺跡
I．山ヶ鼻遺跡
J．菖蒲遺跡
K．菖蒲廃寺跡
L．本高円ノ前遺跡
M．服部遺跡
N．横枕所在遺跡２
O．横枕所在遺跡１
P．倭文遺跡
Q．倭文所在遺跡(仮)
R．古市遺跡
S．宮長竹ケ鼻遺跡
T．橋本遺跡
U．湯谷遺跡
V．伊勢谷遺跡

a．松ケ谷横穴
b．新山城跡
c．鍋山城跡
d．栫間１号墳
e．古海35号墳
f．服部23号墳
g．下味野23号墳
h．中村所在城跡１
i．中村所在城跡２
j．中村須恵器窯跡
k．中村所在横穴
l．中村所在城跡３
m．篠坂所在城跡
n．有富所在城跡
o．横枕55号墳
p．横枕13号墳
q．猪子所在遺跡
r．鴨尾城跡
s．倭文所在遺跡
t．赤子田城跡
u．橋本城跡
v．古郡家１号墳

—凡例—
集落遺跡・遺物散布地
墳墓群・古墳群
主要古墳
横穴
城跡

第１図　横枕古墳群周辺遺跡分布図

見古墳群の他、服部、釣山、古海、徳尾、下味野、横枕他に多くの古墳が造営される。前方後円墳としては古くて大規模な里仁29号墳(85m)、槻間1号墳(92m)から布勢1号墳(59m)、大熊段1号墳(46.5m)、三浦1号墳(36m)等が点在し、新しくて小規模な桂見6号墳(24.5m)、釣山2号墳(26.4m)等も造られる他、古海36号墳(67m)のような前方後方墳も認められる。また千代川右岸では平野の南側丘陵に古墳時代全般を通して築造され、因幡地域最古の前方後円墳とされる六部山3号墳(63m)や古郡家1号墳(90m)等が点在する他、橋本、美和、八坂、越路、広岡、空山、紙子谷、生山他の古墳群が形成されている。　歴史時代になると、湖山池南東部周辺には古代山陰道、駅衙、郡衙が推定されており、律令期の鳥取平野の中心的地域であったと考えられている。また『東大寺東南院文書』からもこの周辺が東大寺領「高庭庄」として開発されたことを読み取ることができる。遺跡としては現在塔心礎が残る菖蒲廃寺、墨書土器の検出された菖蒲遺跡や山ヶ鼻遺跡、多量の墨書土器や緑釉陶器・木簡・祭祀具等が検出された岩吉遺跡等が知られ、その他に千代川対岸で墨書土器や奈良三彩小壺他の検出された古市遺跡等が知られる。中世以降では15世紀に湖山池東岸の天神山に因幡守護山名氏が城を構え、久松山鳥取城へ移るまで因幡支配の拠点とした。横枕周辺では山名氏の家臣であった武田氏の拠城である鵯尾城や倭文城他が丘陵上に形成され、本年度調査された倭文城では竪堀、横堀や土塁、堀切等が検出されている。

Ⅲ　発掘調査の概要

横枕古墳群(PL1)

横枕古墳群は、横枕集落の北側後背丘陵、東側独立丘陵周辺にいくつかの支群を形成しながら現在までに91基が確認されているが、まだ未踏査区域もあり詳細な分布調査で古墳の数の増加が予想されている。本古墳群では主に平成11年度以降の各種開発事業に伴って本格的な発掘調査が実施され、これまでに計50基もの古墳が調査されている。その結果、次第に本古墳群の様相が明らかとなり始めたが、あくまでも現在の行政区分に由来して便宜的に括られた本古墳群を一つの古墳群として取扱ってよいか注意を要する点も指摘されている。

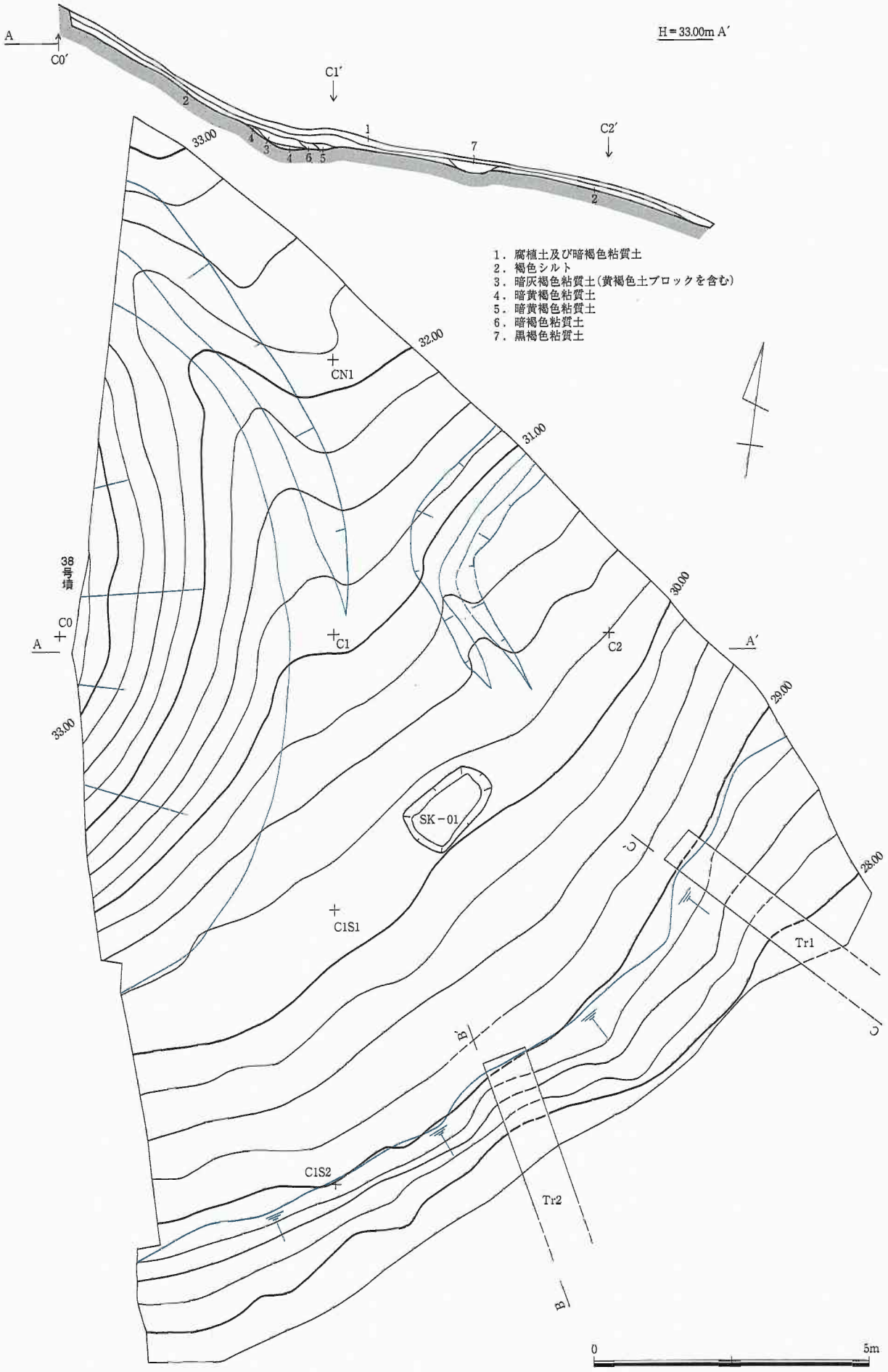
これまでの調査によると、古墳時代前期の古墳は主として各支群中の尾根上に方墳として形成され、埋葬施設は基本的に木棺直葬の形態をとる。前期末から中期前葉に該当する古墳は今のところ確認されておらず、中期中葉頃から尾根上の前期古墳の下位に円墳が形成される。埋葬施設は主として木棺直葬の形態をとり、中心主体以外に僅かに石棺等が認められる。後期になるとさらにその下の尾根上、丘陵斜面、あるいは丘陵上の高標高地など、それまでの時期に造営された古墳を避け、とにかく空いた位置に主に円墳が築造されている。埋葬施設は中心主体は木棺直葬で、それ以外に僅かに石棺が認められ、後期後半代に横穴式石室が導入される。終末期には丘陵裾部に横穴式石室を中心主体とする円墳が築造される。またこの古墳群の特徴として、埋葬に際して土器転用枕が多く使用されること、鉄製品が多く副葬されていることが指摘されている。

1．横枕38号墳（第2、3図；PL1、2）

1）位置と現状　横枕38号墳は横枕集落の北東側、標高30m強の丘陵裾に位置し、その北東側に39号墳が造営される。南東に開ける畑・水田面からの比高差は8m程度である。周辺の丘陵裾には同様の古墳が点在しており、平成11年度には横穴式石室を内部主体とする56号墳が調査されている。調査前の状況は、その南東側前面がかつて畑地等として使用されていたようであるが、現在はその一部も含めて笹薮や雑木林となっており、調査地の東から北側にかけての境界付近からその外部に植林がなされている。調査前の墳丘の遺存状況は良好で、東から南側では2m内外の高まりが認められる。なお今回の調査範囲は調査区の北西端部に位置し、古墳の東側墳丘斜面・周溝の一部が調査対象である。

2）墳丘　墳丘は5～10cm程度の表土およびその下の堆積層である10cm程度の褐色シルト層の下から検

第２図　横枕38号墳周辺調査地地形図



第３図　横枕38号墳周辺調査地遺存図

出した。墳丘の築造は、前述の56号墳の例などと同様の地山整形と盛土によると考えられ、調査地内の低位にあたる南側以外に円弧状の溝を掘り込んで丘陵裾から切り離している。このことから今回の調査地内では古墳自体の調査範囲は狭いものの、本墳は、規模は東西径約15m、高さは東側墳裾から約2.8m程度の円墳と考えられる。

3）埋葬施設・出土遺物等　前述のとおり古墳の調査範囲は狭く、墳頂部もほとんどかかっていなかったが、地内の墳丘斜面や周溝底について平面精査を行った。その結果、墳丘外から後述の新しい時期の遺構を検出した他は当該時期の埋葬施設やその他の遺構は周溝の一部以外には検出されなかった。

当該時期の遺物として蓋杯、高杯の細片や須恵器体部片が周溝埋土中から出土した他、同埋土中から縄文土器片１点も出土したが、いずれも細片で実測するには至らなかった。なお時期については、後期と考えられるが、これらの遺物も周辺からの混入の可能性も考えられることから正確なところは今後の中心主体等の調査の結果を待ちたい。

2．横枕40号墳（第４、５図；PL３、４）

1）位置と現状　横枕40号墳は横枕集落の北東側、標高83～85m弱の丘陵上で、小さな尾根の分岐点付近に位置し、その西側に隣接する41号墳と２基で小支群を形成する。周辺水田面からの比高差は60m強である。調査前の遺存状況は、比較的良好で、東側墳裾からの高まりは2m強が見受けられ、尾根の高位側(墳丘の西側)には尾根を横断するかのような明瞭なカットが認められる。また墳頂部は平坦あるいは僅かに凹むことから、後世の削平を受けている可能性も考えられる。調査前の土地利用状況は、赤松と雑木の混合林である。なお今回の調査範囲は調査区の東端部に位置し、古墳の西側周溝・北側から東側墳丘斜面および墳頂部の一部が調査対象である。

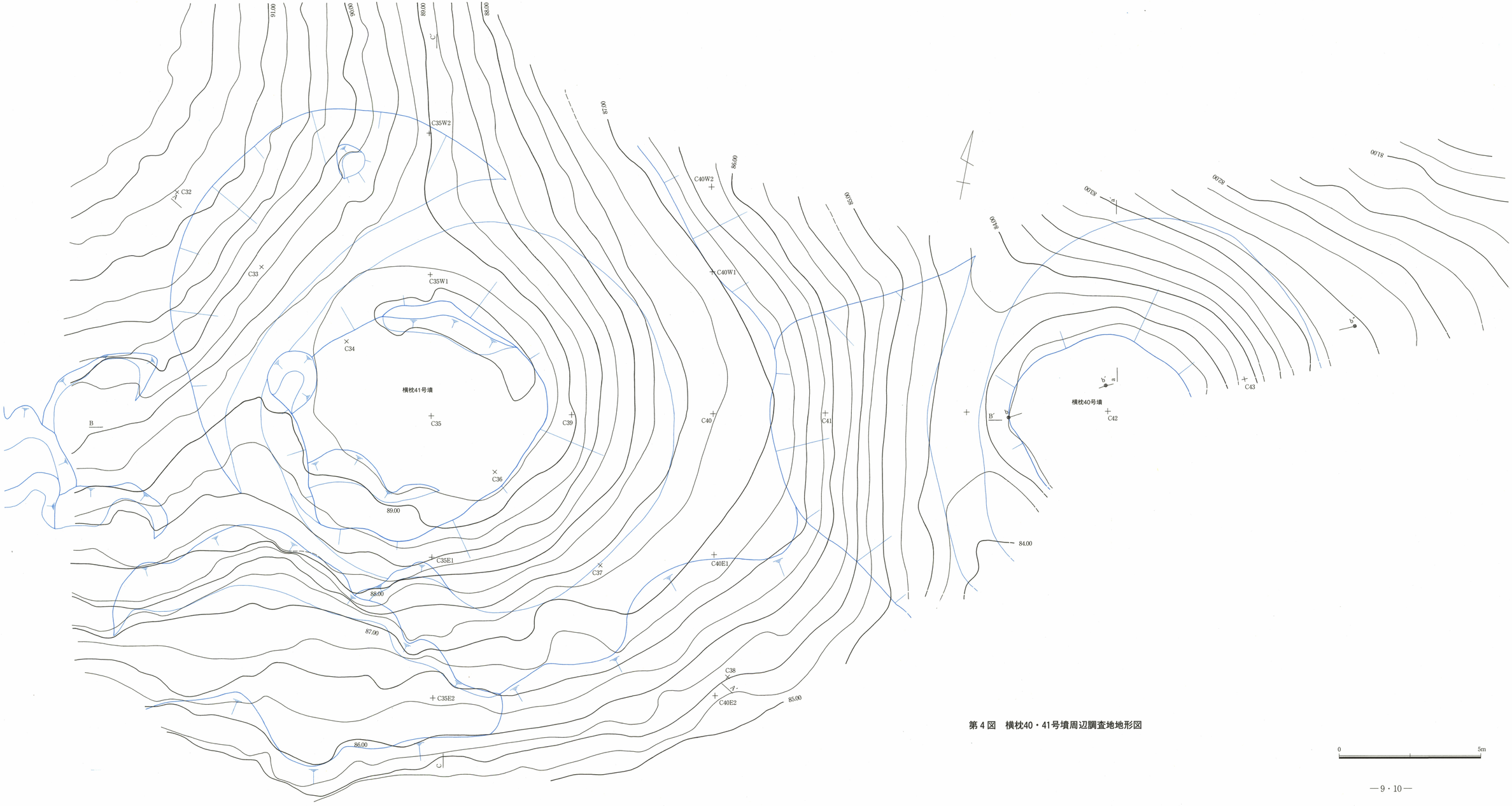
2）墳丘　墳丘は３～５㎝程度の表土下から検出した。狭小の調査範囲内ではあるが、築造は地山整形と盛土によってなされるものと考えられる。このうち地山整形としては、尾根の高位側である墳丘の西側を最大深2.9m、最大幅６m程度弧状に掘り込んで溝とするとともに墳丘部分を尾根から切り離している。他の部分については多くの部分が調査区外となるが、北側および東側裾部の観察から、その裾部を地山カットしていることが見受けられる。またこれらの裾部の土層観察から、溝と地山カットによって造り出された区画の高位側を若干削って低位側へ均すことで墳丘基底部とし、その上に盛土を行ったものと考えられる。したがって盛土は旧表土と考えられる第10(黒褐色粘質土)層上あるいは地山直上になされている。なお現段階ではあるが、本墳は、規模は東西径11.6m、北側墳裾からの高さ1.55m程度の円墳である。

3）埋葬施設・出土遺物等　墳頂部の一部と墳丘斜面、周溝、墳裾テラス部等について平面精査を行った。その結果、周溝底からピット状遺構(P-1＝長軸28㎝×短軸－×深さ19㎝)を１基検出したが埋葬施設は検出できなかった。また当該時期の遺物としては、墳丘肩部、斜面、裾部から赤彩高杯片や須恵器体部片が出土したが、いずれも細片で実測するには至らず、これまでのところ本墳の築造時期は不明である。なお東北東裾部付近からやや浮いた状態で鉄製品１点が検出されている。

3．横枕41号墳（第４～７図；PL１、４～６）

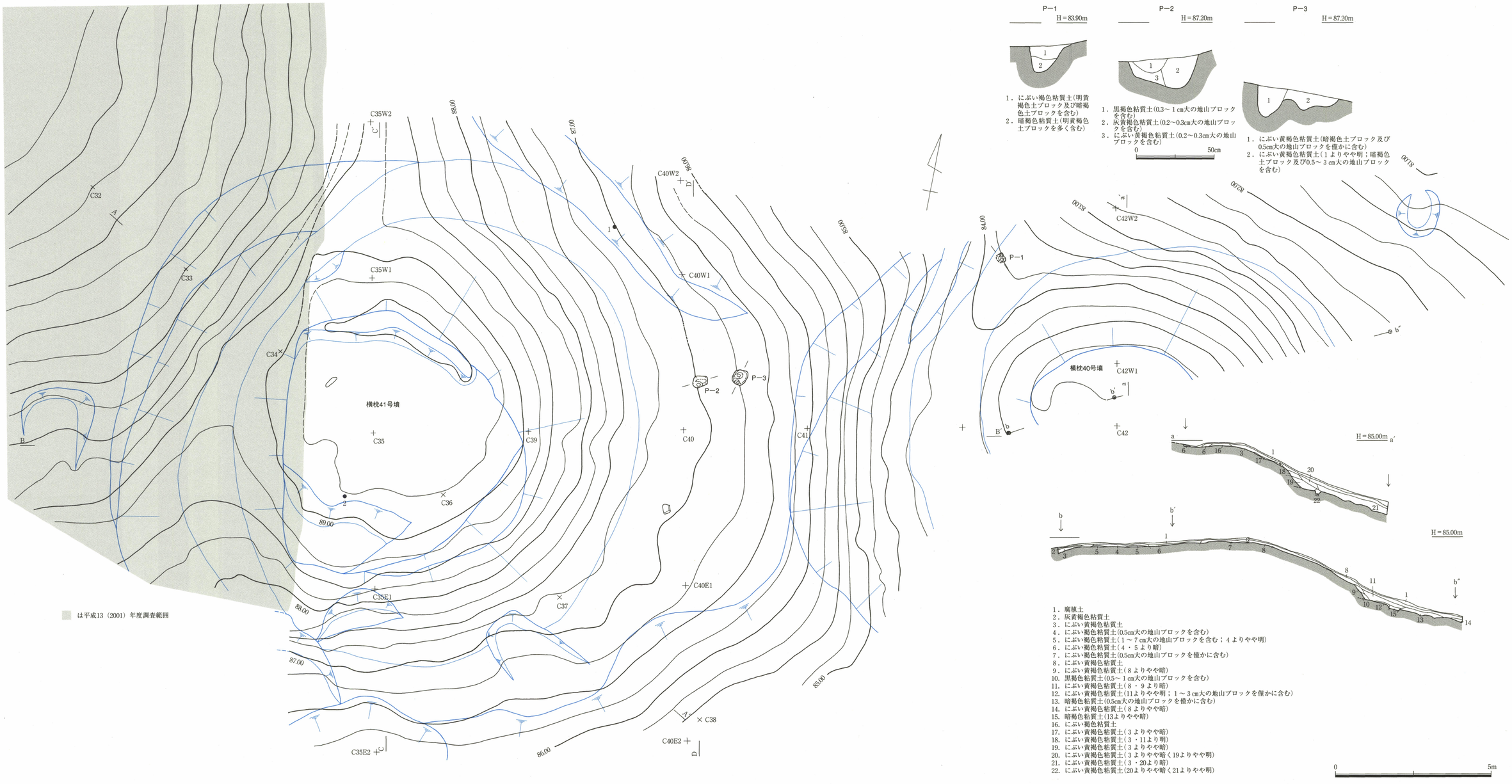
1）位置と現状　横枕41号墳は前述のとおり40号墳の西側に隣接して造営され、標高は87m強～89.5m程度である。平成13年度に南西端部が調査され、既に造成によってカットされている。その他の調査前の遺存状況としては、13年度調査時より墳頂部の一部がやや崩壊していること等を除けば他は大きな変化は認められない。しかしながら、墳頂部はそれ以前の何らかの流失あるいは削平によって大きく抉られ、部分的に外輪山状の高まりが認められる。また墳丘の北側には以前の調査時に検出した周溝の延長部とみられるカット部分が明瞭に認められるとともに、東側にも比較的広い平坦部が認められる。なお調査前の土地利用状況は、40号墳と同様の赤松と雑木の混合林である。

2）墳丘　墳丘は地山整形と多量の盛土によって築造される。このうち地山整形は、既報告と合わせて



第４図　横枕40・41号墳周辺調査地形図

0　5m



P−1　H＝83.90m

1．にぶい褐色粘質土（明黄褐色土ブロック及び暗褐色土ブロックを含む）
2．暗褐色粘質土（明黄褐色土ブロックを多く含む）

P−2　H＝87.20m

1．黒褐色粘質土（0.3～1cm大の地山ブロックを含む）
2．灰黄褐色粘質土（0.2～0.3cm大の地山ブロックを含む）
3．にぶい黄褐色粘質土（0.2～0.3cm大の地山ブロックを含む）

P−3　H＝87.20m

1．にぶい黄褐色粘質土（暗褐色土ブロック及び0.5cm大の地山ブロックを僅かに含む）
2．にぶい黄褐色粘質土（1よりやや明；暗褐色土ブロック及び0.5～3cm大の地山ブロックを含む）

0　50cm

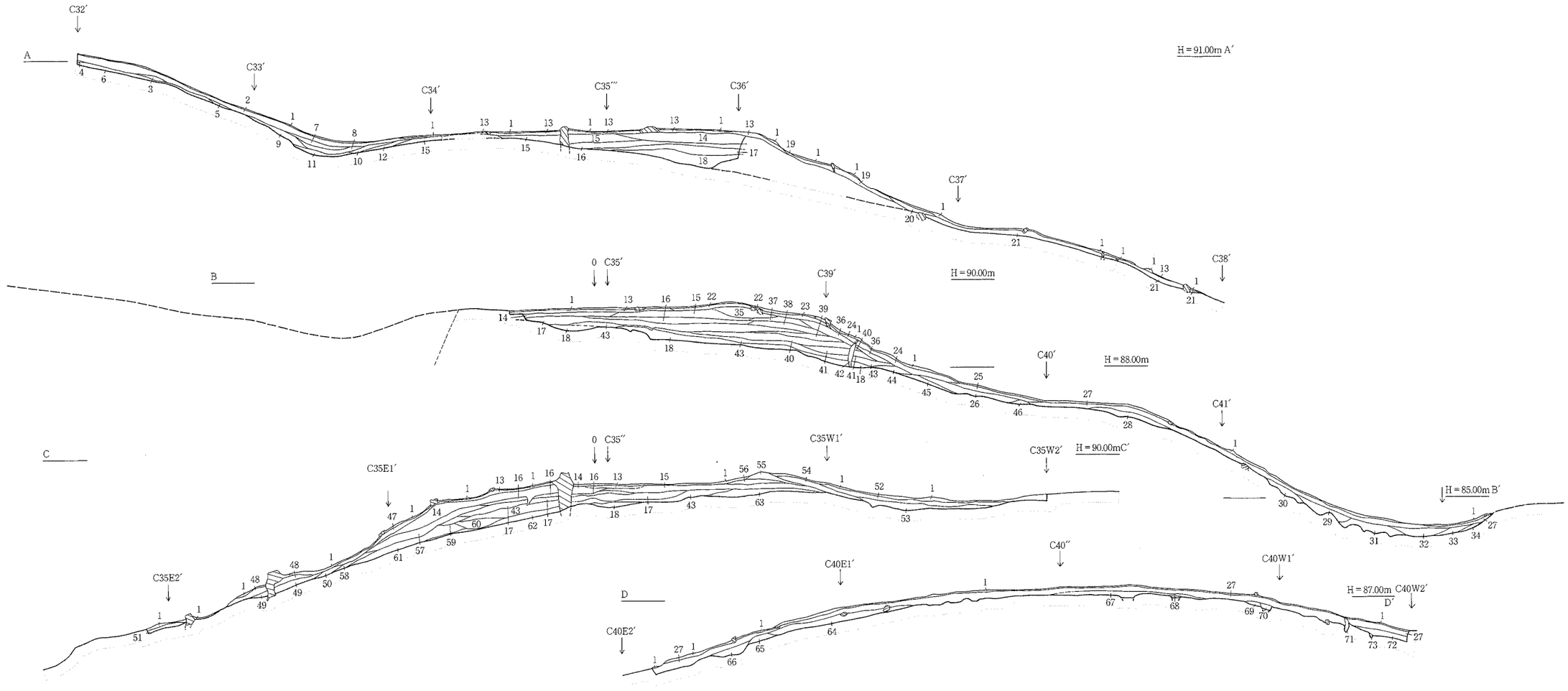
H＝85.00m　a'

H＝85.00m

1．腐植土
2．灰黄褐色粘質土
3．にぶい黄褐色粘質土
4．にぶい褐色粘質土（0.5cm大の地山ブロックを含む）
5．にぶい褐色粘質土（1～7cm大の地山ブロックを含む；4よりやや明）
6．にぶい褐色粘質土（4・5より暗）
7．にぶい褐色粘質土（0.5cm大の地山ブロックを僅かに含む）
8．にぶい黄褐色粘質土
9．にぶい黄褐色粘質土（8よりやや暗）
10．黒褐色粘質土（0.5～1cm大の地山ブロックを含む）
11．にぶい黄褐色粘質土（8・9より暗）
12．にぶい黄褐色粘質土（11よりやや明；1～3cm大の地山ブロックを僅かに含む）
13．暗褐色粘質土（0.5cm大の地山ブロックを僅かに含む）
14．にぶい黄褐色粘質土（8よりやや暗）
15．暗褐色粘質土（13よりやや暗）
16．にぶい褐色粘質土
17．にぶい黄褐色粘質土（3よりやや暗）
18．にぶい黄褐色粘質土（3・11より明）
19．にぶい黄褐色粘質土（3よりやや暗）
20．にぶい黄褐色粘質土（3よりやや暗く19よりやや明）
21．にぶい黄褐色粘質土（3・20より暗）
22．にぶい黄褐色粘質土（20よりやや暗く21よりやや明）

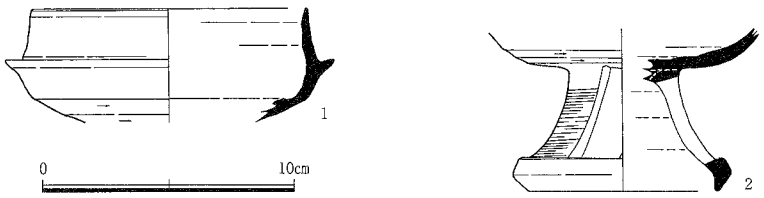
0　5m

第5図　横枕40・41号墳周辺調査地遺存図及び横枕40号墳墳丘断面図、ピット状遺構断面図



1. 腐植土
2. 黄褐色粘質土(ややシルトかかる)
3. 暗黄褐色粘質土(0.3～0.5cm大の明黄褐色土ブロックを含む；僅かに炭片を含む)
4. 黄褐色粘質土(2よりやや暗；3～5cm大の地山ブロック及び炭片を含む)
5. 明黄褐色粘質土(橙色土を若干含む；ややシルトかかる)
6. 明黄褐色粘質土(やや橙色かかる；黄褐色土及び0.5cm大の地山ブロックを含む)
7. 灰褐色粘質土(炭片を僅かに含む)
8. 暗赤褐色粘質土(炭片を僅かに含む)
9. にぶい赤褐色粘質土(にぶい黄褐色土及び炭片を含む)
10. 灰褐色粘質土
11. 明赤褐色粘質土(明橙色土を部分的に含む；赤褐色土ブロックを含む)
12. 赤褐色粘質土(橙色土を若干含む)
13. 褐色粘質土
14. 明赤褐色粘質土
15. にぶい黄褐色粘質土(明赤褐色土ブロックを多く含む)
16. にぶい黄褐色粘質土～にぶい褐色粘質土(橙色土ブロック及び明赤褐色土ブロックを多く含む)
17. にぶい褐色粘質土～にぶい黄褐色粘質土(16より褐色度やや強；橙色土ブロック及び明赤褐色土ブロックを密に含む)
18. にぶい褐色粘質土～にぶい黄褐色粘質土(ブロックは含まない)
19. にぶい赤褐色粘質土
20. 褐色粘質土(0.5cm大の地山ブロックを僅かに含む)
21. にぶい黄褐色粘質土～にぶい褐色粘質土(0.5～4cm大の地山ブロックを含む)
22. 褐色粘質土(13と類似するが、にぶい黄褐色土ブロックを含む)
23. 赤褐色粘質土
24. 赤褐色粘質土(23よりやや暗)
25. にぶい褐色粘質土(ややにぶい黄褐色土かかる)
26. にぶい黄褐色粘質土～暗褐色粘質土
27. にぶい黄褐色粘質土
28. にぶい黄褐色粘質土(27より暗)
29. にぶい黄褐色粘質土(27より暗)
30. にぶい黄褐色粘質土(27よりやや暗く、29より明)
31. 暗褐色粘質土(0.2～0.3cm大の地山ブロックを含む)
32. 褐色粘質土
33. にぶい黄褐色粘質土(27より明；0.3～1cm大の地山ブロックを僅かに含む)
34. にぶい黄褐色粘質土(33よりやや明)
35. にぶい赤褐色粘質土～褐色粘質土
36. 褐色粘質土
37. にぶい褐色粘質土(やや赤褐色かかる)
38. にぶい褐色粘質土(37よりやや明るく、16よりやや赤褐色かかる；.にぶい黄褐色土ブロック及び橙色土ブロックを含む)
39. にぶい黄褐色粘質土(17より暗；灰黄褐色土ブロックを含む)
40. 褐色粘質土(黄褐色土ブロック、橙色土ブロック、にぶい黄褐色土ブロック及び2～12cm大の地山ブロックを含む)
41. 褐色粘質土～にぶい黄褐色粘質土(40より暗く、やや赤褐色かかる；2～5cm大の地山ブロックを含む)
42. にぶい褐色粘質土
43. 褐色粘質土(にぶい黄褐色土ブロック、橙色土ブロック、明赤褐色土ブロック及び灰黄褐色土ブロックを密に含む)
44. 暗褐色粘質土(黒褐色土を含む)
45. にぶい黄褐色粘質土
46. にぶい黄褐色粘質土(27より明)
47. にぶい赤褐色粘質土
48. 褐色粘質土
49. 褐色粘質土(48よりやや明)
50. にぶい褐色粘質土(58よりやや暗)
51. にぶい褐色粘質土
52. にぶい赤褐色粘質土
53. 暗赤褐色粘質土～暗褐色粘質土(黒褐色かかる)
54. 赤褐色粘質土
55. 明赤褐色粘質土～赤褐色粘質土(54よりやや明)
56. 明赤褐色粘質土(黄褐色土ブロック及びにぶい黄褐色土ブロックを多く含む)
57. にぶい褐色粘質土(ややにぶい赤褐色粘質土かかる)
58. にぶい褐色粘質土(50よりやや明)
59. にぶい褐色粘質土(17よりやや暗)
60. 褐色粘質土(43より明；橙色粘質土ブロックを僅かに含む)
61. 褐色粘質土～にぶい褐色粘質土
62. 黄褐色粘質土～明褐色粘質土(しまっている)
63. 褐色粘質土(黒褐色かかる；明褐色土ブロックを含む)
64. にぶい黄褐色粘質土(27より暗；7～15cm大の地山ブロックを含む)
65. にぶい黄褐色粘質土(27より明；2～10cm大の地山ブロックを僅かに含む)
66. にぶい黄褐色粘質土(27より暗；2～5cm大の地山ブロックを僅かに含む)
67. にぶい黄褐色粘質土(27より暗)
68. にぶい黄褐色粘質土(67よりやや暗)
69. にぶい黄褐色粘質土(27より暗)
70. にぶい黄褐色粘質土(69よりやや暗)
71. にぶい黄褐色粘質土(27より暗)
72. にぶい黄褐色粘質土(27より暗)
73. にぶい黄褐色粘質土(72よりやや暗)

第6図　横枕41号墳墳丘断面図



第７図　横枕41号墳出土遺物実測図

考えると、尾根の高位(北西)側を最大深1.5m、最大幅5.5m程度の弧状の溝を掘り込んで墳丘部分を尾根から切り離している。また他の部分についてはその裾部を地山カットして墳裾テラス部を形成するとともに、溝と地山カットによって造り出された円形区画の高位側を若干削って低位側へ均すことで墳丘基底部とし、その上に盛土を行っている。盛土は最も遺存状況の悪い尾根の高位(北西)側で約10cm、最も深く遺存する尾根の低位(東)側で80cm程度を測る。なお本墳は、墳丘規模は南北間で径12.3m、高さは東側墳裾からで2.1mを測る円墳である。

３）埋葬施設・出土遺物等　埋葬施設は平面精査、墳丘断ち割り、盛土除去を行った結果、盛土以前に地山を掘り込むもの、あるいは遺存する盛土を掘り込んでいるものは検出されなかった。

当該時期の遺物として墳頂部南東および南西側盛土中から杯身や高杯脚部片が、また南東側墳裾部表土中から円形・長方形・三角形の透しをもつ脚台部片、北東および東側墳裾テラス部表土・流土中から平底底部片・体部片・杯身口縁部片・有蓋高杯片等が出土した。このうち北東側墳裾検出の杯身(１)、南西側盛土中検出の高杯(２)について図化した。杯身(１)は復元口径10.8cm、同受け部径13.0cmで、立上りはやや垂直気味に立上る。受け部は端部を短くつまみ出し、底部へラケズリは体部の１/２程度に認められる。高杯(２)は杯底部の一部と脚部の遺存であるが、短い脚部はハの字形に外反し、端部で外方に段をなしてから下方へ鈎形に曲げる。脚部にはカキ目を施し、台形状の透しを３方向に持つ。これらの遺物から、本墳の築造時期は古墳時代中期末から後期前葉頃で、平成12年度調査の横枕42、53～55、57、58号墳の支群と相前後して造成されたものと考えられる。

なお、墳丘の東側テラス部からピット状遺構２基(Ｐ－２＝長軸48cm×短軸37cm×深さ21cm、Ｐ－３＝長軸52cm×短軸46cm×深さ21cm)を検出したが遺物もなく詳細は不明である。

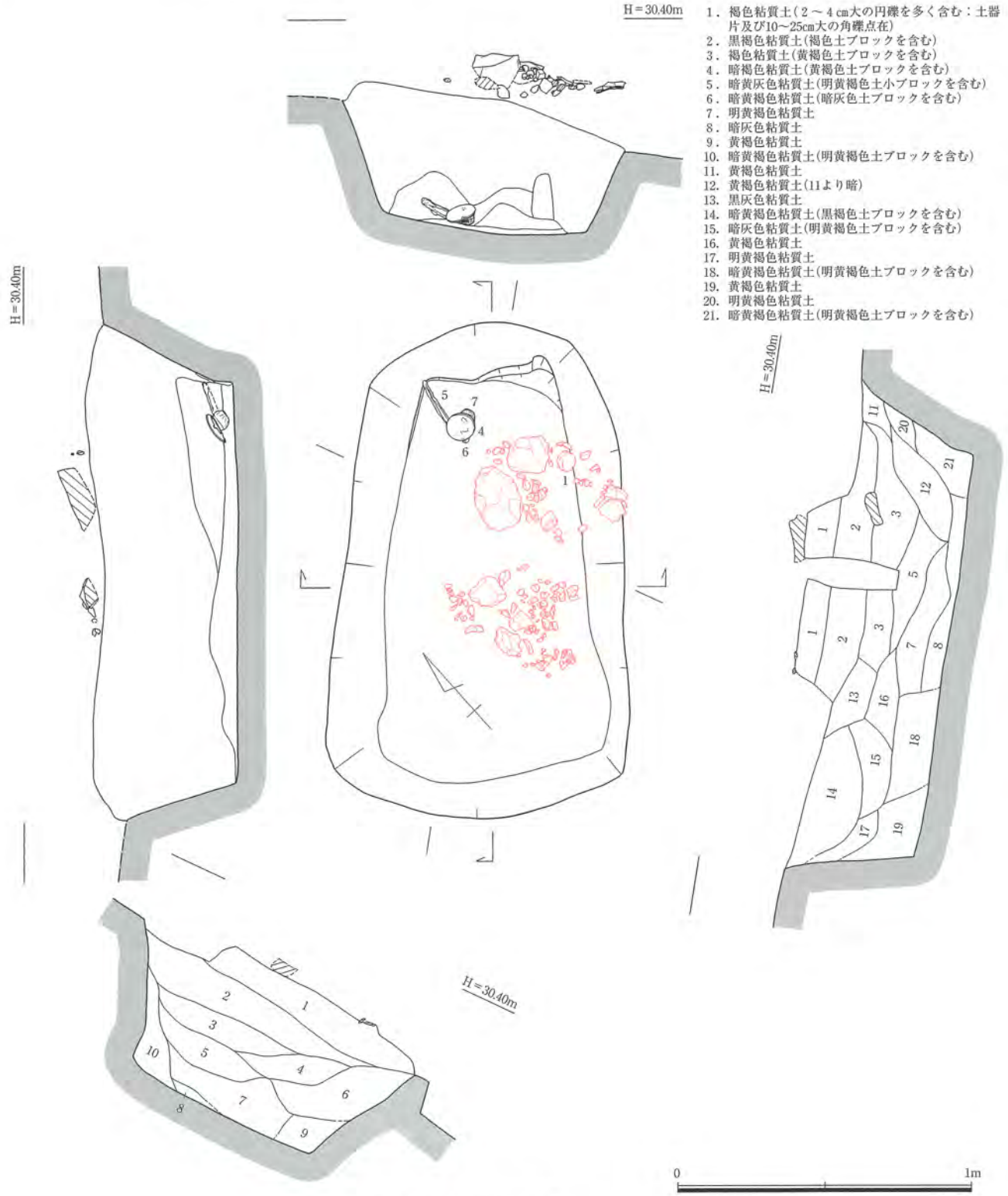
４．　その他の遺構　(第８、９図；PL７～９)

今回の２か所の調査地内からは、丘陵上の調査区から前述のピット状遺構３基と、丘陵裾の調査区から土壙１基(SK-01)、溝状遺構１条を検出した。

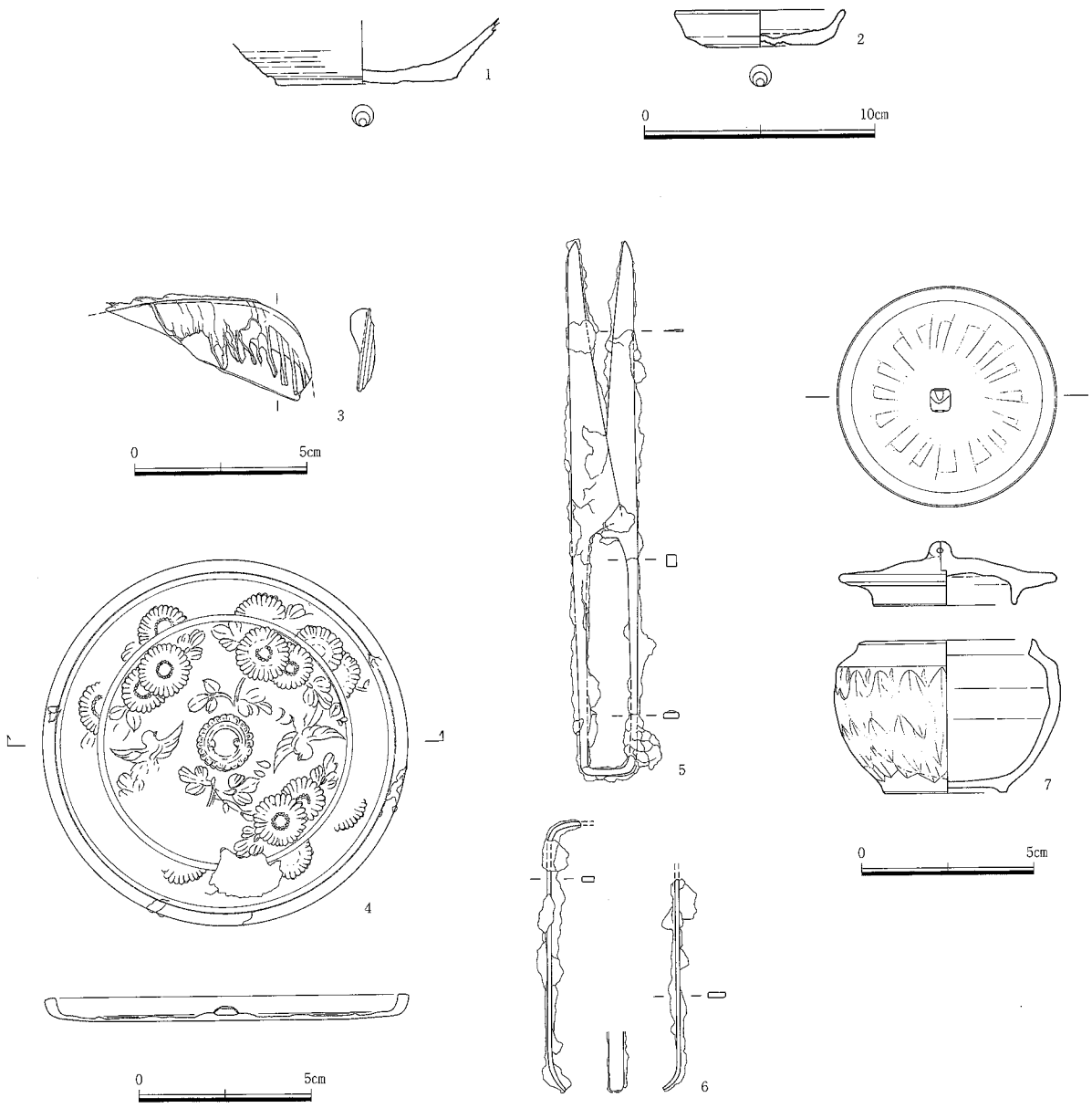
１）SK-01　丘陵裾部の横枕38号墳の南東側の表土下から検出した埋葬施設と考えられる土壙で、平面形は隅丸長方形プランを基調としたとも考えられるが隅丸の長台形状を呈する。主軸はN-42.5°-Eにとり地山を掘り込む。断面は逆台形状で、規模は、長さ1.69m、幅1.03m、深さ0.53mを測る。

遺物は、最上層上面付近から10～25cm大の数個の角礫と２～４cm大の多量の円礫、土師器(１、２)、詳細不明鉄製品が検出され、北隅側床面からはまとまって櫛(３)、鏡(４)、鋏(５)、毛抜き状鉄製品(６)、小壺(７)、漆片、木細片が検出された。墓壙上面検出の土師器杯(１)は、底径7.4cmを測り、調整はやや不明瞭ながら内外面ヨコナデと見られ、底部は糸切りである。(２)の土師器皿は、復元口径7.3cm、器高1.55cmを測る。内外面ともヨコナデで内面中央には後ナデが認められ、底部は糸切りである。墓壙内検出の横櫛(３)は片側端部のみの遺存であるが、漆の可能性が考えられる皮膜に覆われた最大厚4.5mmの棟部分が厚みを減じながら緩やかに端部に向けて曲がる。歯は把部から削り出され、現存で計10本程度認められるが、１cmあたりに４本程度と目が粗く解櫛と考えられる。その片面には板状の木片が付着して遺存する。菊花双鳥鏡(４)は薄い鏡胎で外傾するやや厚めの周縁を持つ直径10.6cmの小型鏡で、２羽の小鳥や菊花は花蕊座の紐を中心に回転対称の位置にある。周縁に部分的に繊維状のものの付着が認められ、布に包まれていたことが想像される。鋏(５)は握り鋏で、全長15.56cm、刃長8.5cm

を測る。毛抜き状鉄製品(6)は鉄板(棒)の両側をやや叩き伸ばしたものをU字形に曲げさらにその両先端部を内側に曲げた現代の毛抜きと同様の形態を持ち、遺存長は7.9cmを測る。青白磁の小壷(7)はつまみを持って外面に放射状の陽刻がなされた口径4.05cm・器高1.85cm・かえり径6.3cmの蓋と、外面に花弁を模したと見られる陽刻がなされた口径4.9cm・底径3.05cm・器高4.45cm・最大胴径6.05cmの壷のセットで、灰白色の胎土に青みがかった釉が外面にかかる。下端部から底面は無釉である。これらの遺物のうち(3)～(7)は、鏡の下に小壷、櫛、鋏、毛抜き状鉄製品が置かれるが、前述のとおり木細片や漆片がこれらの周辺から検出されていることから、床面上検出の遺物の総てあるいはその一部が、漆塗



第8図　SK-01実測図



第９図　SK-01出土遺物実測図

りの木製容器に入れられて埋納された可能性も考えられる。なお出土遺物から本土壙の時期は、平安時代末から鎌倉時代初頭頃と考えられる。

２）溝状遺構　丘陵裾部、横枕38号墳の東側の表土下から検出した。溝の一端は調査区外へ伸びており、平面形は検出現況で鉤形に曲がるが、全体としてはコの字形に曲がってその囲まれた中を周辺から切り離す区画溝の可能性が考えられる。断面は浅い皿状で、規模は、検出長5.3m、最大幅1.4m、深さ0.25m前後である。なお現在のところ明確に時期を示す遺物もなく、本溝の時期は不明である。

参考文献

鳥取市文化財団『鳥取市横枕古墳群Ⅰ』2002
鳥取市文化財団『横枕古墳群Ⅱ』2003
久保智康『日本の美術３　No394　中世・近世の鏡』至文堂、1999

PL. 1

1．調査地遠景航空写真
（東南東上空から）

2．横枕38号墳周辺調査地
遠景（南東から）

3．横枕40・41号墳周辺調査地
遠景（北西から）

1．横枕38号墳周辺調査地
調査前（東から）

2．横枕38号墳周辺調査地
調査後（南南東から）

3．横枕38号墳墳丘断面
（南から）

PL. 3

1．横枕40号墳周辺調査地
調査前（南西から）

2．横枕40号墳周辺調査地
調査後（西南西から）

3．横枕40号墳墳丘断面
（北東から）

1．横枕40号墳西南西側周溝部
断面（南東から）

2．横枕40号墳北東側墳裾部
遺物出土状況（北東から）

3．横枕41号墳周辺調査地
調査前（北東から）

PL. 5

1．横枕41号墳周辺調査地
調査後（北東から）

2．横枕41号墳墳丘断面(1)
（南西から）

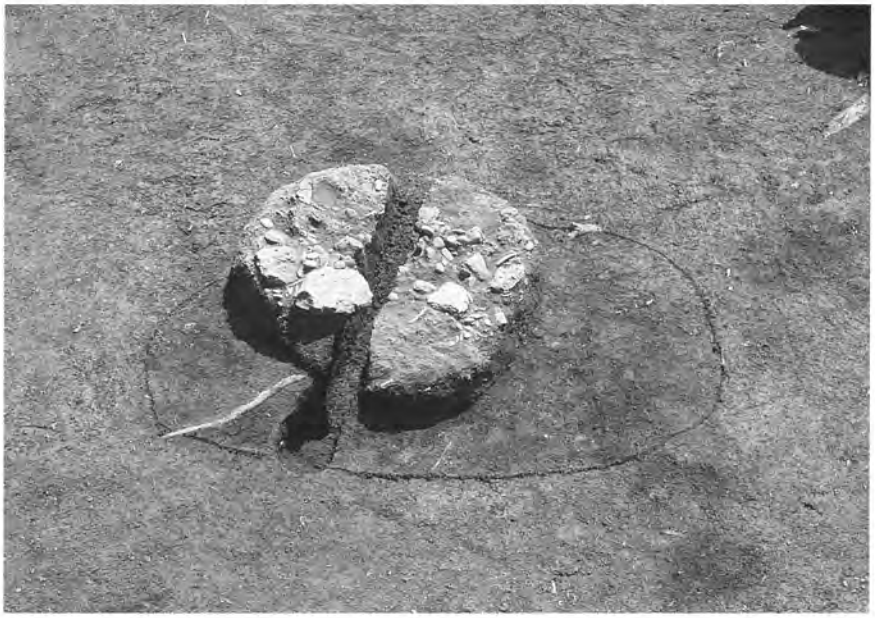
3．横枕41号墳墳丘断面(2)
（南東から）

1．横枕41号墳出土遺物

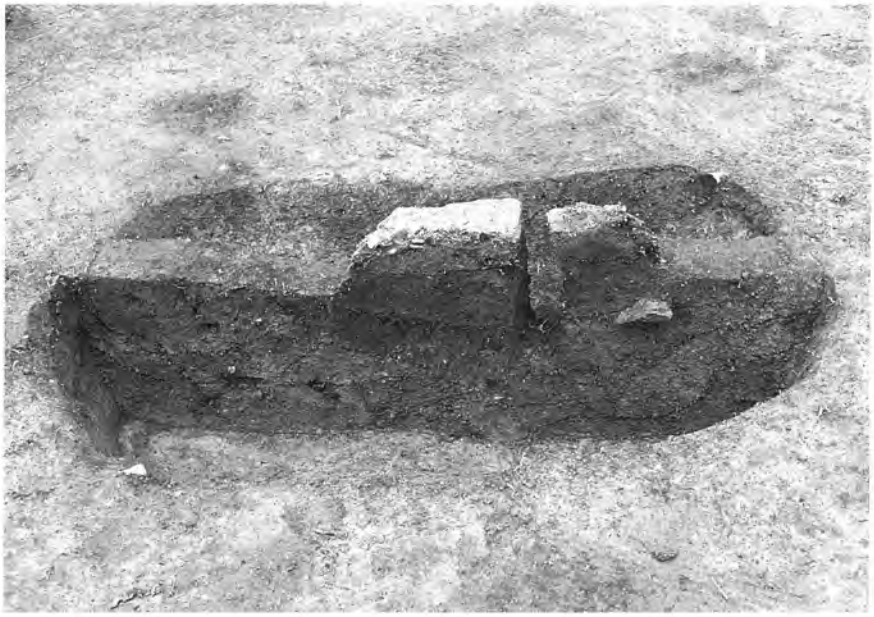
2．P－2断面(上)、完掘状況(下)(北北西から)

3．P－3断面(上)、完掘状況(下)(南東から)

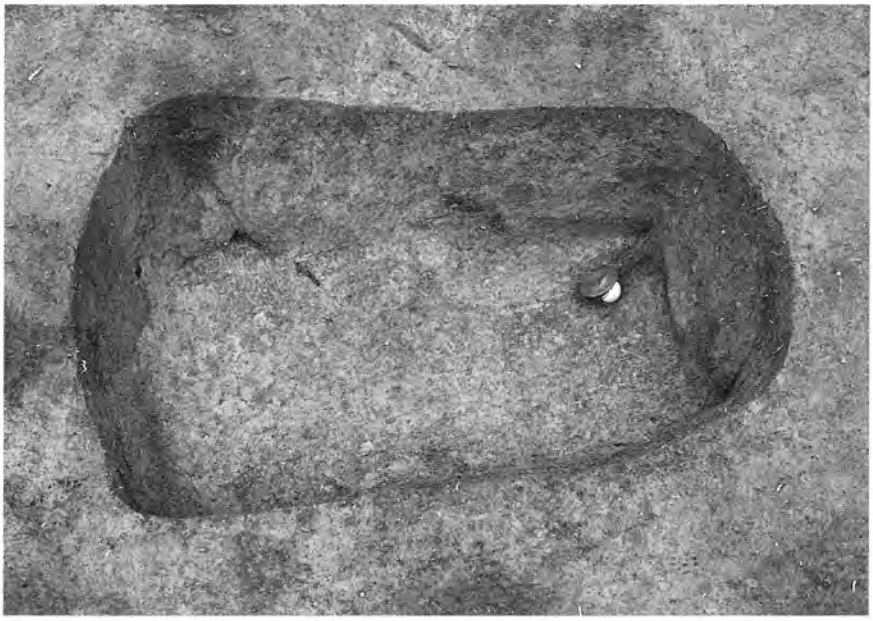
PL. 7



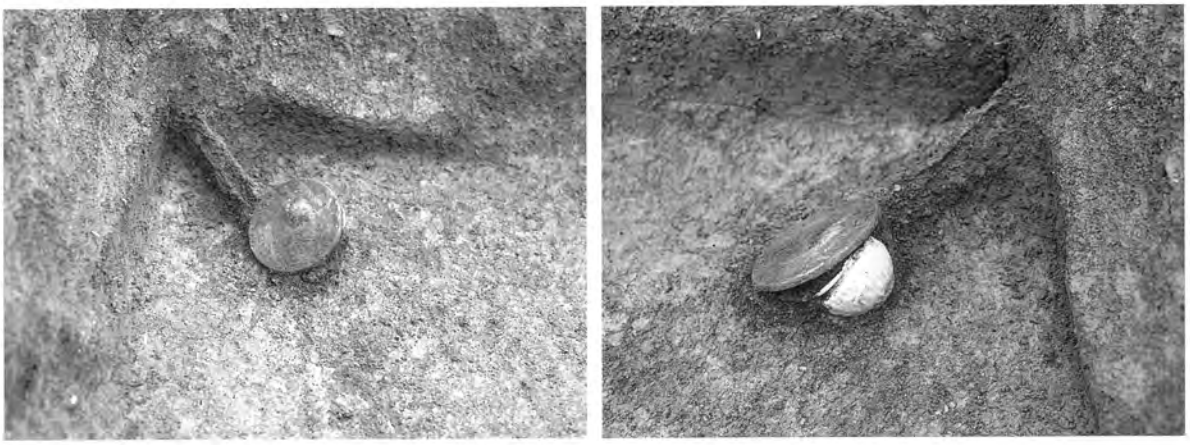
1．SK-01検出状況
（北西から）



2．SK-01縦断面
（南東から）



3．SK-01掘り下げ状況
（南東から）



1．SK-01内遺物出土状況(左／南西から；右／南東から)

2．SK-01出土遺物(1)

PL. 9

4

7

5

6

1．SK-01出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	とっとりし　よこまくらこふんぐんはっくつちょうさがいようほうこくしょ
書名	鳥取市横枕古墳群発掘調査概要報告書
副書名	姫鳥線整備促進関連事業に係る横枕38・40・41号墳の調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	山田真宏
編集機関	財団法人　鳥取市文化財団
所在地	〒680-0015　鳥取県鳥取市上町88　　TEL　(0857)23-2140
発行年月日	西暦　2004年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
横枕古墳群（よこまくらこふんぐん）	鳥取市横枕（とっとりしよこまくら）	31201					合計 795	道路整備促進関連事業に伴う調査
38号墳				35° 27′ 27″	134° 11′ 36″	20031125 ～ 20040329		
40・41号墳				35° 27′ 30″	134° 11′ 32″	20031125 ～ 20040329		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
横枕古墳群	古墳	古墳時代 中期末～後期	古墳　3基 ピット3基	土師器：高杯 須恵器：杯身、高杯、有蓋高杯、脚台部 鉄製品	
	中世墓	平安時代末～ 鎌倉時代初頭	土壙　1基	土師器：皿、杯 櫛 鏡 鉄製品：鋏、毛抜き状鉄製品 青白磁：小壺	

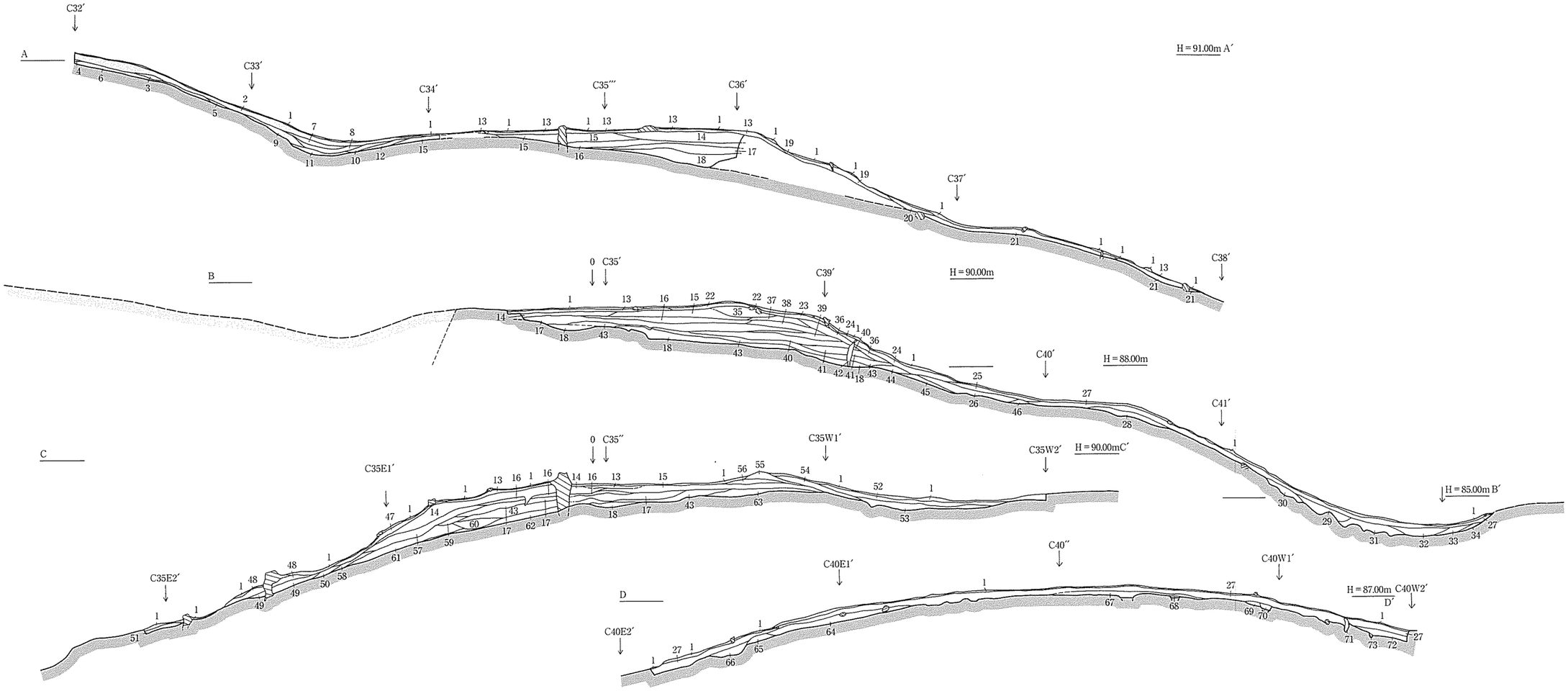
鳥取市 横枕古墳群発掘調査概要報告書

姫鳥線整備促進関連事業に係る横枕38・40・41号墳の調査

平成16年３月　印刷・発行

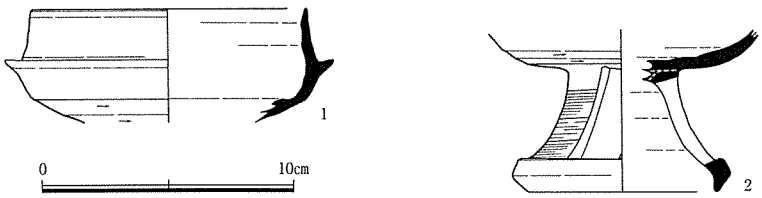
編集・発行　財団法人　鳥取市文化財団

印刷所　勝美印刷株式会社



1．腐植土
2．黄褐色粘質土(ややシルトかかる)
3．暗黄褐色粘質土(0.3～0.5cm大の明黄褐色土ブロックを含む；僅かに炭片を含む)
4．黄褐色粘質土(2よりやや暗；3～5cm大の地山ブロック及び炭片を含む)
5．明黄褐色粘質土(橙色土を若干含む；ややシルトかかる)
6．明黄褐色粘質土(やや橙色かかる；黄褐色土及び0.5cm大の地山ブロックを含む)
7．灰褐色粘質土(炭片を僅かに含む)
8．暗赤褐色粘質土(炭片を僅かに含む)
9．にぶい赤褐色粘質土(にぶい黄褐色土及び炭片を含む)
10．灰褐色粘質土
11．明赤褐色粘質土(明橙色土を部分的に含む；赤褐色土ブロックを含む)
12．赤褐色粘質土(橙色土を若干含む)
13．褐色粘質土
14．明赤褐色粘質土
15．にぶい黄褐色粘質土(明赤褐色土ブロックを多く含む)
16．にぶい黄褐色粘質土～にぶい褐色粘質土(橙色土ブロック及び明赤褐色土ブロックを多く含む)
17．にぶい褐色粘質土～にぶい黄褐色粘質土(16より褐色度やや強；橙色土ブロック及び明赤褐色土ブロックを密に含む)
18．にぶい褐色粘質土～にぶい黄褐色粘質土(ブロックは含まない)
19．にぶい赤褐色粘質土
20．褐色粘質土(0.5cm大の地山ブロックを僅かに含む)
21．にぶい黄褐色粘質土～にぶい褐色粘質土(0.5～4cm大の地山ブロックを含む)
22．褐色粘質土(13と類似するが、にぶい黄褐色土ブロックを含む)
23．赤褐色粘質土
24．赤褐色粘質土(23よりやや暗)
25．にぶい褐色粘質土(ややにぶい黄褐色土かかる)
26．にぶい黄褐色粘質土～暗褐色粘質土
27．にぶい黄褐色粘質土
28．にぶい黄褐色粘質土(27より暗)
29．にぶい黄褐色粘質土(27より暗)
30．にぶい黄褐色粘質土(27よりやや暗く、29より明)
31．暗褐色粘質土(0.2～0.3cm大の地山ブロックを含む)
32．褐色粘質土
33．にぶい黄褐色粘質土(27より明；0.3～1cm大の地山ブロックを僅かに含む)
34．にぶい黄褐色粘質土(33よりやや明)
35．にぶい赤褐色粘質土～褐色粘質土
36．褐色粘質土
37．にぶい褐色粘質土(やや赤褐色かかる)
38．にぶい褐色粘質土(37よりやや明るく、16よりやや赤褐色かかる；.にぶい黄褐色土ブロック及び橙色土ブロックを含む)
39．にぶい黄褐色粘質土(17より暗；灰黄褐色土ブロックを含む)
40．褐色粘質土(黄褐色土ブロック、橙色土ブロック、にぶい黄褐色土ブロック及び2～12cm大の地山ブロックを含む)
41．褐色粘質土～にぶい黄褐色粘質土(40より暗く、やや赤褐色かかる；2～5cm大の地山ブロックを含む)
42．にぶい褐色粘質土
43．褐色粘質土(にぶい黄褐色土ブロック、橙色土ブロック、明赤褐色土ブロック及び灰黄褐色土ブロックを密に含む)
44．暗褐色粘質土(黒褐色土を含む)
45．にぶい黄褐色粘質土
46．にぶい黄褐色粘質土(27より明)
47．にぶい赤褐色粘質土
48．褐色粘質土
49．褐色粘質土(48よりやや明)
50．にぶい褐色粘質土(58よりやや暗)
51．にぶい褐色粘質土
52．にぶい赤褐色粘質土
53．暗赤褐色粘質土～暗褐色粘質土(黒褐色かかる)
54．赤褐色粘質土
55．明赤褐色粘質土～赤褐色粘質土(54よりやや明)
56．明赤褐色粘質土(黄褐色土ブロック及びにぶい黄褐色土ブロックを多く含む)
57．にぶい褐色粘質土(ややにぶい赤褐色粘質土かかる)
58．にぶい褐色粘質土(50よりやや明)
59．にぶい褐色粘質土(17よりやや暗)
60．褐色粘質土(43より明；橙色粘質土ブロックを僅かに含む)
61．褐色粘質土～にぶい褐色粘質土
62．黄褐色粘質土～明褐色粘質土(しまっている)
63．褐色粘質土(黒褐色かかる；明褐色土ブロックを含む)
64．にぶい黄褐色粘質土(27より暗；7～15cm大の地山ブロックを含む)
65．にぶい黄褐色粘質土(27より明；2～10cm大の地山ブロックを僅かに含む)
66．にぶい黄褐色粘質土(27より暗；2～5cm大の地山ブロックを僅かに含む)
67．にぶい黄褐色粘質土(27より暗)
68．にぶい黄褐色粘質土(67よりやや暗)
69．にぶい黄褐色粘質土(27より暗)
70．にぶい黄褐色粘質土(69よりやや暗)
71．にぶい黄褐色粘質土(27より暗)
72．にぶい黄褐色粘質土(27より暗)
73．にぶい黄褐色粘質土(72よりやや暗)

第6図　横枕41号墳墳丘断面図



第７図　横枕41号墳出土遺物実測図

考えると、尾根の高位(北西)側を最大深1.5m、最大幅5.5m程度の弧状の溝を掘り込んで墳丘部分を尾根から切り離している。また他の部分についてはその裾部を地山カットして墳裾テラス部を形成するとともに、溝と地山カットによって造り出された円形区画の高位側を若干削って低位側へ均すことで墳丘基底部とし、その上に盛土を行っている。盛土は最も遺存状況の悪い尾根の高位(北西)側で約10cm、最も深く遺存する尾根の低位(東)側で80cm程度を測る。なお本墳は、墳丘規模は南北間で径12.3m、高さは東側墳裾からで2.1mを測る円墳である。

３）埋葬施設・出土遺物等　埋葬施設は平面精査、墳丘断ち割り、盛土除去を行った結果、盛土以前に地山を掘り込むもの、あるいは遺存する盛土を掘り込んでいるものは検出されなかった。

当該時期の遺物として墳頂部南東および南西側盛土中から杯身や高杯脚部片が、また南東側墳裾部表土中から円形・長方形・三角形の透しをもつ脚台部片、北東および東側墳裾テラス部表土・流土中から平底底部片・体部片・杯身口縁部片・有蓋高杯片等が出土した。このうち北東側墳裾検出の杯身(１)、南西側盛土中検出の高杯(２)について図化した。杯身(１)は復元口径10.8cm、同受け部径13.0cmで、立上りはやや垂直気味に立上る。受け部は端部を短くつまみ出し、底部ヘラケズリは体部の１/２程度に認められる。高杯(２)は杯底部の一部と脚部の遺存であるが、短い脚部はハの字形に外反し、端部で外方に段をなしてから下方へ鈎形に曲げる。脚部にはカキ目を施し、台形状の透しを３方向に持つ。これらの遺物から、本墳の築造時期は古墳時代中期末から後期前葉頃で、平成12年度調査の横枕42、53～55、57、58号墳の支群と相前後して造成されたものと考えられる。

なお、墳丘の東側テラス部からピット状遺構２基(P－２＝長軸48cm×短軸37cm×深さ21cm、P－３＝長軸52cm×短軸46cm×深さ21cm)を検出したが遺物もなく詳細は不明である。

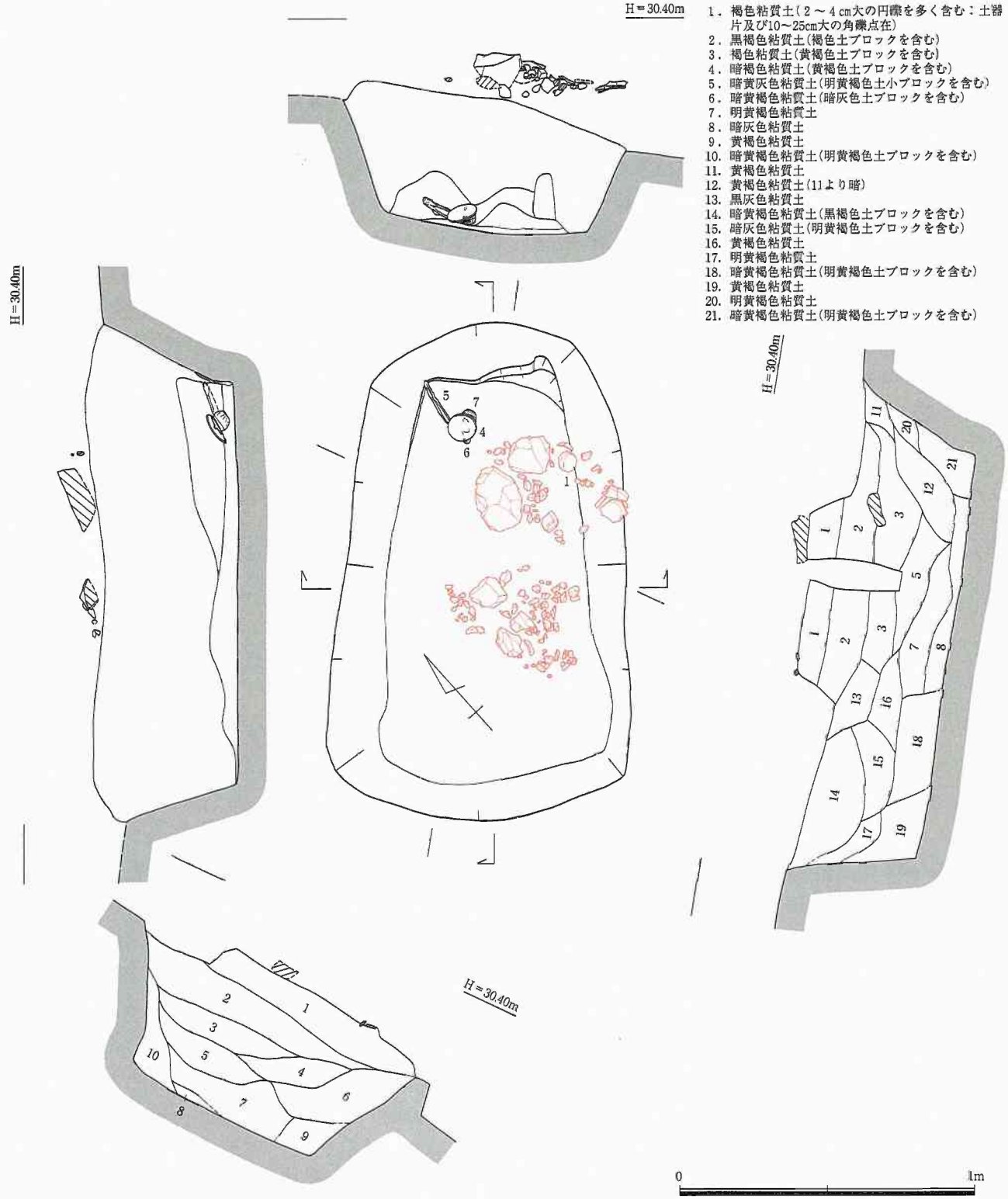
４．その他の遺構　(第８、９図；PL７～９)

今回の２か所の調査地内からは、丘陵上の調査区から前述のピット状遺構３基と、丘陵裾の調査区から土壙１基(SK-01)、溝状遺構１条を検出した。

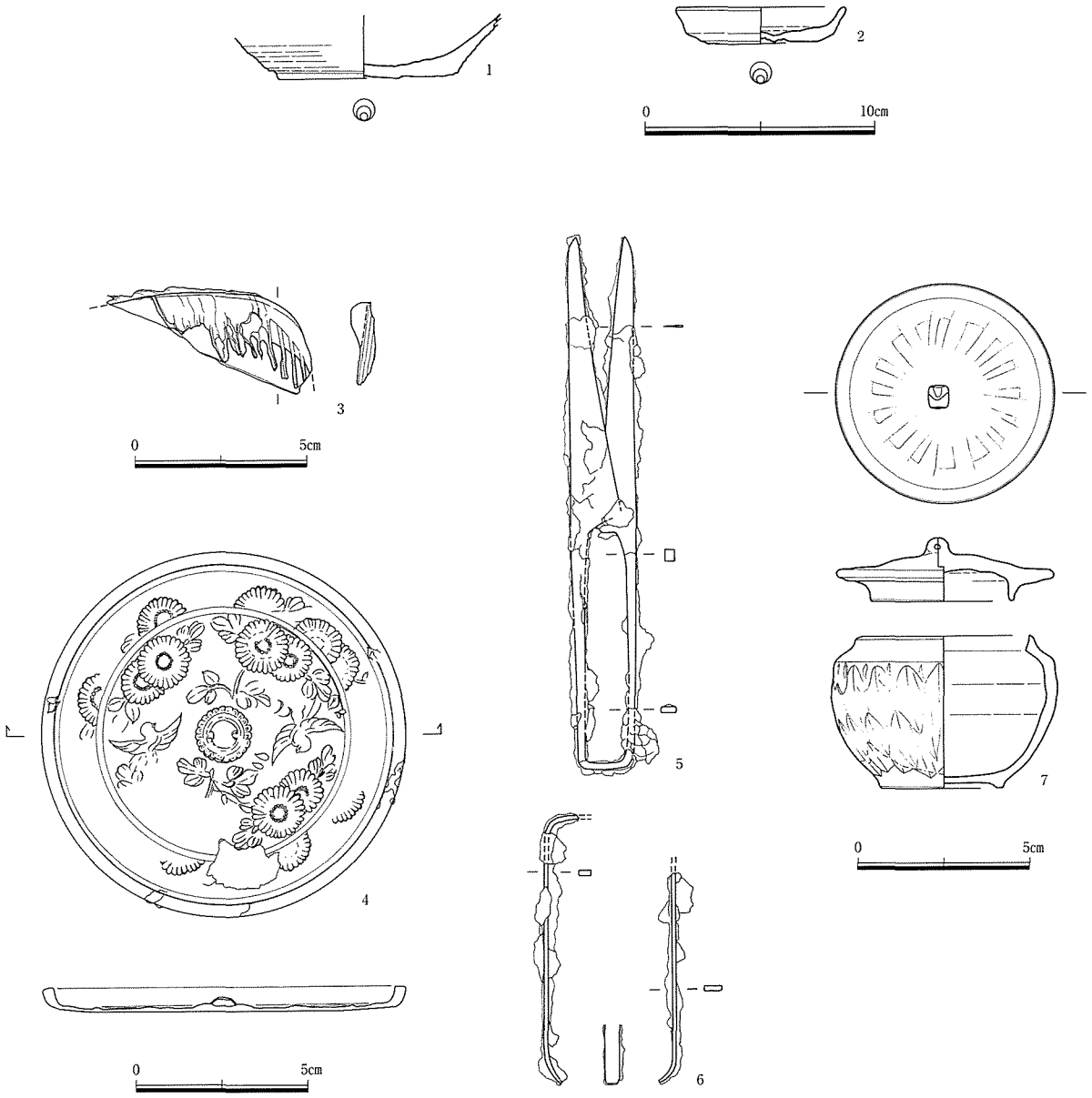
１）SK-01　丘陵裾部の横枕38号墳の南東側の表土下から検出した埋葬施設と考えられる土壙で、平面形は隅丸長方形プランを基調としたとも考えられるが隅丸の長台形状を呈する。主軸はN-42.5°-Eにとり地山を掘り込む。断面は逆台形状で、規模は、長さ1.69m、幅1.03m、深さ0.53mを測る。

遺物は、最上層上面付近から10～25cm大の数個の角礫と２～４cm大の多量の円礫、土師器(１、２)、詳細不明鉄製品が検出され、北隅側床面からはまとまって櫛(３)、鏡(４)、鋏(５)、毛抜き状鉄製品(６)、小壷(７)、漆片、木細片が検出された。墓壙上面検出の土師器杯(１)は、底径7.4cmを測り、調整はやや不明瞭ながら内外面ヨコナデと見られ、底部は糸切りである。(２)の土師器皿は、復元口径7.3cm、器高1.55cmを測る。内外面ともヨコナデで内面中央には後ナデが認められ、底部は糸切りである。墓壙内検出の横櫛(３)は片側端部のみの遺存であるが、漆の可能性が考えられる皮膜に覆われた最大厚4.5mmの棟部分が厚みを減じながら緩やかに端部に向けて曲がる。歯は把部から削り出され、現存で計10本程度認められるが、１cmあたりに４本程度と目が粗く解櫛と考えられる。その片面には板状の木片が付着して遺存する。菊花双鳥鏡(４)は薄い鏡胎で外傾するやや厚めの周縁を持つ直径10.6cmの小型鏡で、２羽の小鳥や菊花は花蕊座の紐を中心に回転対称の位置にある。周縁に部分的に繊維状のものの付着が認められ、布に包まれていたことが想像される。鋏(５)は握り鋏で、全長15.56cm、刃長8.5cm

を測る。毛抜き状鉄製品(6)は鉄板(棒)の両側をやや叩き伸ばしたものをU字形に曲げさらにその両先端部を内側に曲げた現代の毛抜きと同様の形態を持ち、遺存長は7.9cmを測る。青白磁の小壷(7)はつまみを持って外面に放射状の陽刻がなされた口径4.05cm・器高1.85cm・かえり径6.3cmの蓋と、外面に花弁を模したと見られる陽刻がなされた口径4.9cm・底径3.05cm・器高4.45cm・最大胴径6.05cmの壷のセットで、灰白色の胎土に青みがかった釉が外面にかかる。下端部から底面は無釉である。これらの遺物のうち(3)～(7)は、鏡の下に小壷、櫛、鋏、毛抜き状鉄製品が置かれるが、前述のとおり木細片や漆片がこれらの周辺から検出されていることから、床面上検出の遺物の総てあるいはその一部が、漆塗



第8図　SK-01実測図



第9図　SK-01出土遺物実測図

りの木製容器に入れられて埋納された可能性も考えられる。なお出土遺物から本土壙の時期は、平安時代末から鎌倉時代初頭頃と考えられる。

2）溝状遺構　丘陵裾部、横枕38号墳の東側の表土下から検出した。溝の一端は調査区外へ伸びており、平面形は検出現況で鈎形に曲がるが、全体としてはコの字形に曲がってその囲まれた中を周辺から切り離す区画溝の可能性が考えられる。断面は浅い皿状で、規模は、検出長5.3m、最大幅1.4m、深さ0.25m前後である。なお現在のところ明確に時期を示す遺物もなく、本溝の時期は不明である。

参考文献

鳥取市文化財団『鳥取市横枕古墳群Ⅰ』2002
鳥取市文化財団『横枕古墳群Ⅱ』2003
久保智康『日本の美術3　No394　中世・近世の鏡』至文堂、1999

PL. 1

1．調査地遠景航空写真
（東南東上空から）

2．横枕38号墳周辺調査地
遠景（南東から）

3．横枕40・41号墳周辺調査地
遠景（北西から）

1．横枕38号墳周辺調査地
調査前（東から）

2．横枕38号墳周辺調査地
調査後（南南東から）

3．横枕38号墳墳丘断面
（南から）

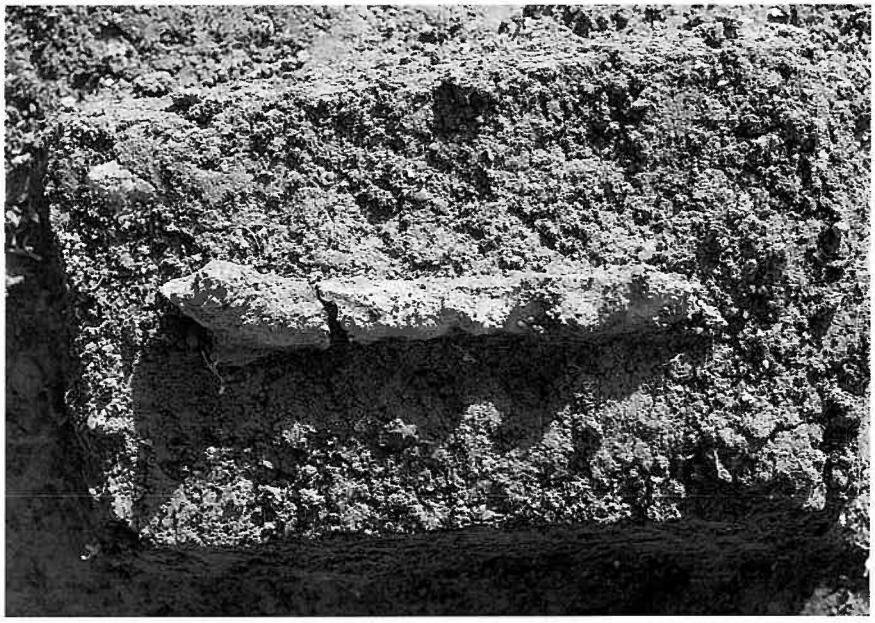
PL. 3

1．横枕40号墳周辺調査地
調査前（南西から）

2．横枕40号墳周辺調査地
調査後（西南西から）

3．横枕40号墳墳丘断面
（北東から）

1．横枕40号墳西南西側周溝部
断面（南東から）



2．横枕40号墳北東側墳裾部
遺物出土状況（北東から）

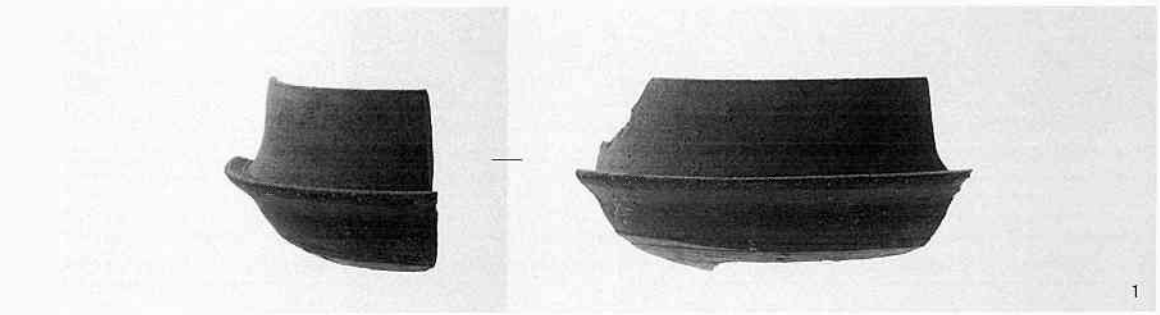
3．横枕41号墳周辺調査地
調査前（北東から）

PL. 5

1．横枕41号墳周辺調査地
調査後(北東から)

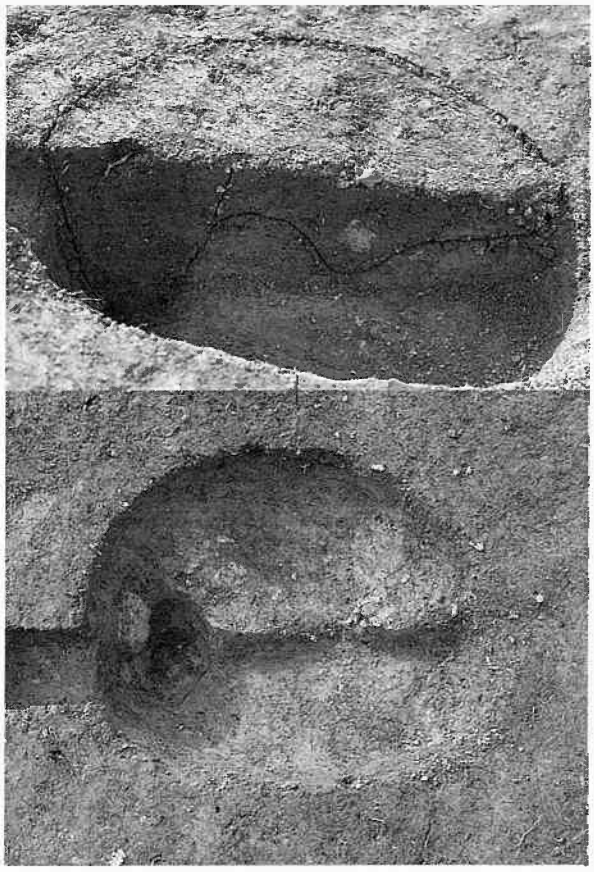
2．横枕41号墳墳丘断面(1)
(南西から)

3．横枕41号墳墳丘断面(2)
(南東から)



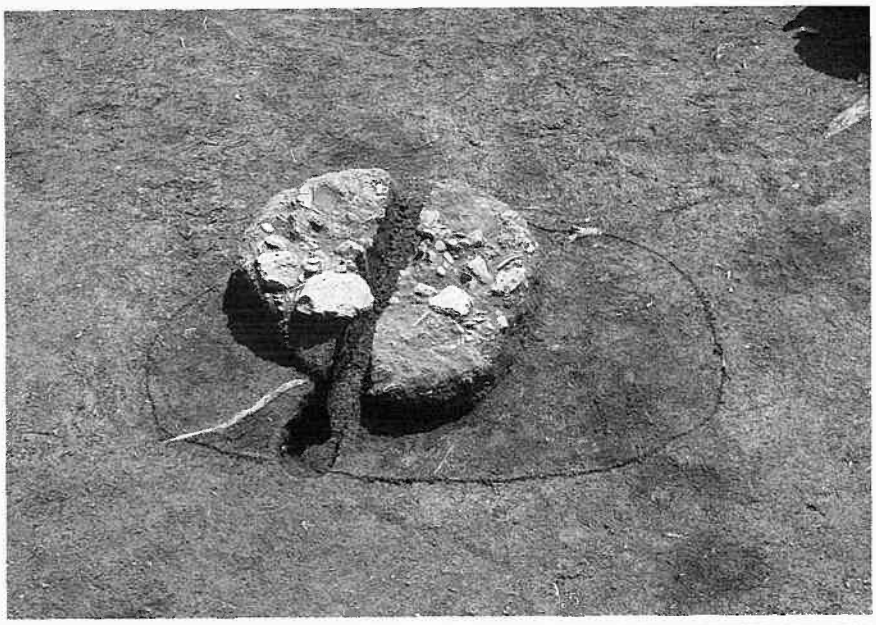
1．横枕41号墳出土遺物

2．P－2断面(上)、完掘状況(下)(北北西から)

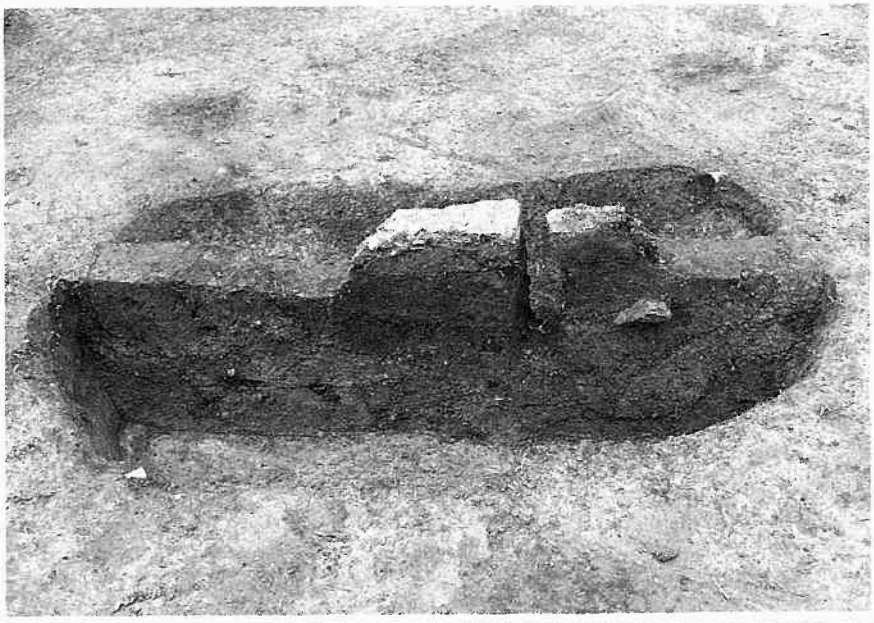


3．P－3断面(上)、完掘状況(下)(南東から)

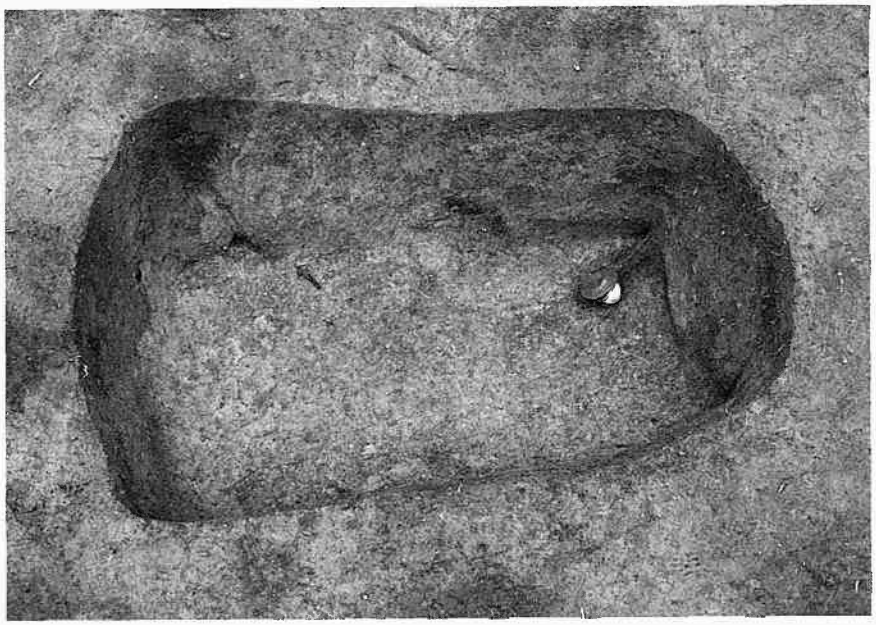
PL. 7



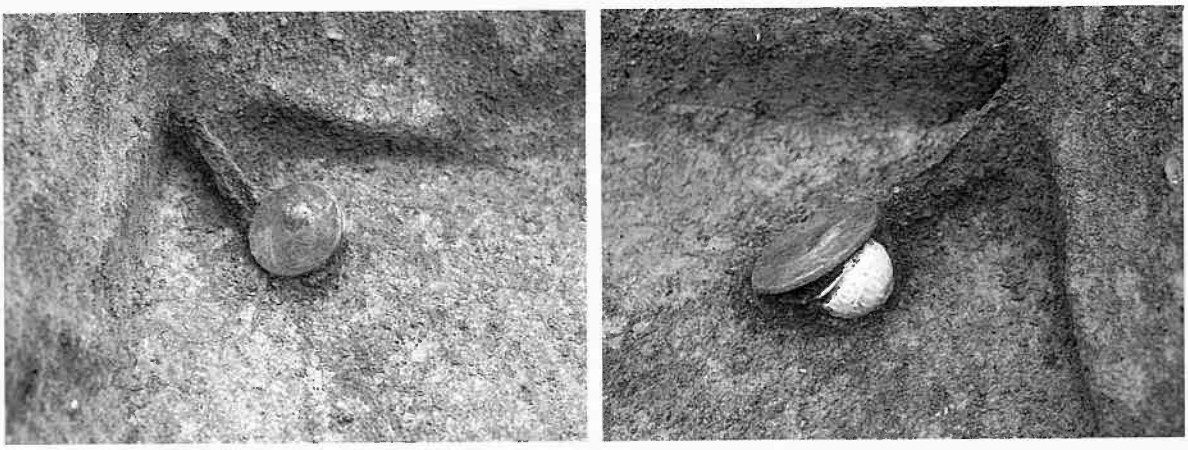
1．SK-01検出状況
（北西から）



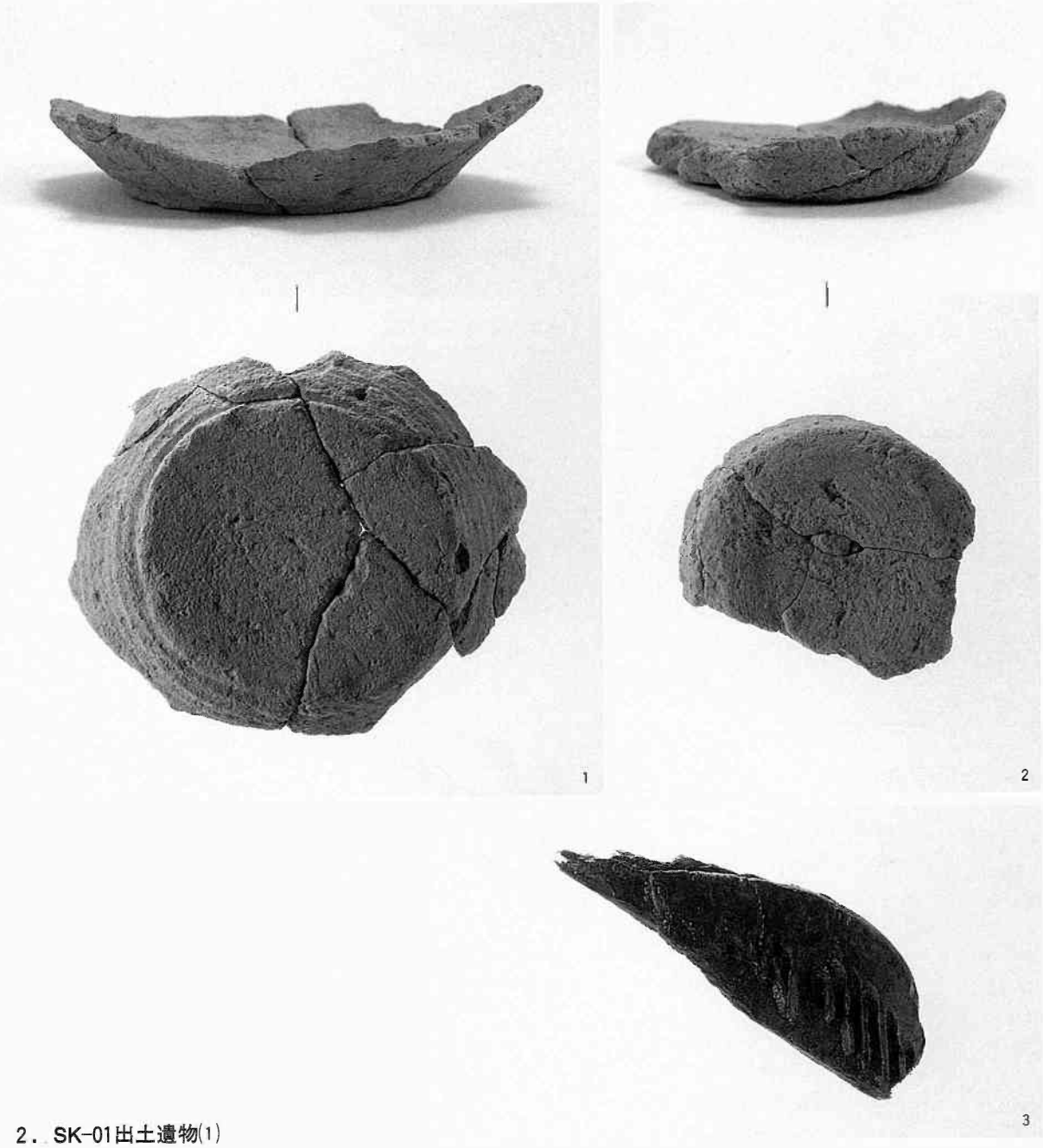
2．SK-01縦断面
（南東から）



3．SK-01掘り下げ状況
（南東から）



1．SK-01内遺物出土状況(左／南西から；右／南東から)

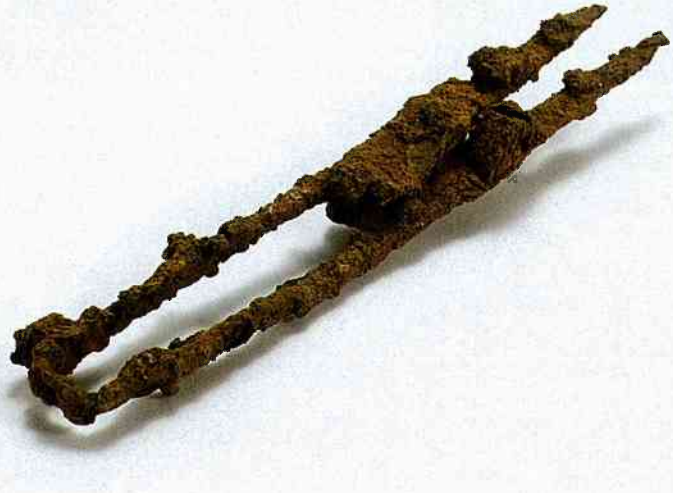


2．SK-01出土遺物(1)

PL. 9

4

7



5

6

1．SK-01出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	とっとりし　よこまくらこふんぐんはっくつちょうさがいようほうこくしょ
書名	鳥取市横枕古墳群発掘調査概要報告書
副書名	姫鳥線整備促進関連事業に係る横枕38・40・41号墳の調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	山田真宏
編集機関	財団法人　鳥取市文化財団
所在地	〒680-0015　鳥取県鳥取市上町88　　TEL　(0857)23-2140
発行年月日	西暦　2004年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
横枕古墳群 (よこまくらこふんぐん)	鳥取市横枕 (とっとりしよこまくら)	31201						道路整備促進関連事業に伴う調査
38号墳				35° 27′ 27″	134° 11′ 36″	20031125 ～ 20040329	合計 795	
40・41号墳				35° 27′ 30″	134° 11′ 32″	20031125 ～ 20040329		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
横枕古墳群	古墳	古墳時代 中期末～後期	古墳　3基 ピット3基	土師器：高杯 須恵器：杯身、高杯、有蓋高杯、脚台部 鉄製品	
	中世墓	平安時代末～ 鎌倉時代初頭	土壙　1基	土師器：皿、杯 櫛 鏡 鉄製品：鋏、毛抜き状鉄製品 青白磁：小壷	

鳥取市 横枕古墳群発掘調査概要報告書

姫鳥線整備促進関連事業に係る横枕38・40・41号墳の調査

平成16年3月　印刷・発行

編集・発行　財団法人　鳥取市文化財団

印刷所　勝美印刷株式会社